
† 正義の崩壊者 †

堕倉 夜罪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十正義の崩壊者+

【Zコード】

Z2566V

【作者名】

墮倉 夜罪

【あらすじ】

ある日自室で原因不明の大爆発が起こり、俺は死んだ筈だった。

しかし瞼を閉じ、次に目を開くとそこには神と名乗る仮面の男が居た。

男は言った。

「貴様を今から力を与え、転生させる。転生先の悪を葬り続けても
らうがな」

そして色々訳あって幻想郷に居着くことになった。

どうも、作者です。

先に言つておきますがこの小説は色々な理や設定をこれでもかつて
具合にぶち壊します。たぶん…

苦手な人は見ない方がいいです。

【小説家になろう】では初投稿となります。

何分ボキヤ貧作者の氣まぐれとノリで構成されているため誤字脱字
がパナいかもです。

コメ等も荒らしでないなら大歓迎です！！

最初の転生は幻想郷

「ククク……遂に来たぞ！！幻想郷！！取りあえずミスティアだ
！…どこだミスティア！！」

遙か彼方の地、幻想郷。

夏でも無いのに大量の向日葵が咲き誇る向日葵畑のド真ん中にバカの姿が……そこにはあった。

てか俺ですね、バカです。

「俺の名前は鬼澤 靖！歳は17で身長は173、体重64キロ、
特徴は特徴がないこと…強いて言つならネット充かなwww」

「人の敷地内で何やつてんのよ？」

.....。

おつと、死亡フラグがやつて来やがつたよコンチクシヨウ。

現在、俺の目の前でキレてらつしやる御方は風見幽香その人だつた。いきなり幻想郷の話をするのも何だ、俺が転生する前の事を話そう。

時は遡り、俺が転生する少し前。

いつも通り部屋で掲示板を巡回していた時の事、急に田も眩む程の強烈な光を放つ球体が部屋の宙に出現した。

「な、なんだこれー?」

そしてそれは徐々に膨張し……強大な大爆発を引き起こした。まあ当然と言つか……

目の前で爆発したもんだから痛みを感じる前に即死ですね……

リア充じゃないのに……

そして気が付くとおかしな事に五体の感覚がある。

重たい瞼を開くと、真っ白な部屋に俺と、仮面を付け、赤いフード付きのマントに身を包んだ人がポツンと居た。

「目が覚めたか。よく聞け脆弱なる人間。今からお前を転生させる」

いきなり何言つてんだコイツ。それと声からして男らしい。

「あんた誰よ?」

取りあえず一番の疑問はそれ。

「我が？人間の語で言うと神に当たる存在だ」

紙？髪？なんつた？

「神だ。そんなことより」

「オウドンタベタイ！..！」

「ゲームは解るか？」

スルーッスか、なかなかのスキルをお持ちの神様で WWW

「ゲームって何の？」

「携帯ゲームやテレビゲームの事を言っている」

「知ってるも何もやりまくりまくりですよ」

「なら話は早い、お前を転生させる先はゲームの世界になるからな

アールグレイネタもスルーかよ……てか一次元入りk t k r

「何のゲームよ?」

「それは好きなのを貴様が選べ。一番最初に決めるのは拠点となる世界だ、慎重に……」

「なら迷うことなく東方だーーー！」

「ふむ、それはいいが一息に東方と言つてもどの作品だ?」

「は?それってつまり東方紅魔郷を選択したら地靈殿とか妖怪の山とか行けなくなるわけ?」

「それが嫌か？」

「当たり前だろ？」

「ならば条件付きでその願いに応えよう」

「条件？」

「そう……東方紅魔郷の異変解決を巫女の代わりにやり遂げる……それができたら共有化してやる。もっとも紅魔館以外の場は最初から移動可能だが」

「初っ端から紅魔郷かよ……えげつない」

「勿論貴様には力をやる。コイツを受け取れ」

そつ言つて神は何かを投げて寄越した。

反射的にそれを受け取り、よく見れば俺の携帯だった。

「なめてんのか？たかが携帯一個で紅魔組に勝てるってもー。」

「焦るな、そのデバイスは色々改造してある」

神の説明によるところだ。

十半永久駆動

バッテリーの改良により、充電をしなくても動く。

十圈外無視

圈外なにそれおいしそのうしい。

十弾幕切り取り機能

まんま文花帖。決定ボタンを100回押せば一枚撮れる。

十弾幕生成機能

切り取った写メを消費することでその弾幕を好きな方向へ放てる。

十破壊耐性最大

どんな手段を使っても破壊出来ないらしい。

あと耐水加工もされてるらしい。

十全料金無償化
イヤッホウネットし放題

十一武具の召喚

詳細を入力して起動するとその武具が召喚できるらしい

十二瞬間移動機能

場所を入力して起動するとその世界にあればその場所へ送還される。

等々、なんかチート紛いのとびひつでも良やわうつなのが混ざってるが
気にしない。

「隨時アプリを追加してやる。必要無いと判断したものは勝手に削
除するが」

「いまいち実感わかないけどまあいいか……」

俺の携帯に勝手なことじやがって。

「では、転生の儀を始める

そこで俺の意識は途絶え、現在に至る。

「出で行くなあらあと10秒以内ね…… 10、9、8、7、6、5…」

一目散に逃げたよ。

逃げなきゃ死ぬしね。

俺は向田葵畠から離れ、早速携帯を開いた。

「ええ～と…目的地紅魔館の地下

早速フラグ建てますお~~~~

一瞬にして俺は恐らうだが紅魔館地下に来ていた。

「薄気味悪いな」

移動先は厳重に施錠された扉の前。当然この先に最終鬼畜妹が……

「誰？」

「待ってる、今出してやる」

携帯のアプリの内の一つ、武具生成機能を起動し、こう入力した。

分類、籠手

強度、壊れない

能力、衝撃による反動ゼロ

触れたものに分解効果

装備時想い描いただけで弾幕を放てる

装備時空中浮遊が可能になる

やつぱチート使わなことどうやらこの扉は傷一つ付かないようだ
ww

入力を終えると両手に自動的に籠手が装着された。

見た目は黒を基調としたなんかの甲殻っぽいのが付いており、重み
はたぶん片方2キロ弱程度。

特に変わった所は見られない。

「どれどれ」

扉に触れる。するとみるみるうちに扉と門カシタキがサビ、崩れ落ちた。

「一応分解の範囲は制御できるんだな」

「な……一体どうやってその扉を……パチュリーの能力無力化の魔法が掛かってるのに……」

「チートにそんなもの関係無いＺＥ　とりあえずこいつにおりで

「あなた誰？」

「俺は鬼澤颯。 レミリア・スカーレットが発生させてる紅い霧を消させに来た」

「紅い霧？ それと私に何の関係があるの！？ 私はここから出ちゃいけないの……関わらないですよ……」

「フツ……なら弾幕ごっこで俺が勝つたら着いてきて貰う、スペカの制限なしの3回被弾で負け」

「人間」トキが私に勝てると思ってるノ？」

「さあてね？」

「壊ス…………！」

俺との距離を一直線に詰めるフラン。

「スペルカード発動【禁忌】レーゴア テイン」

スペル宣言と同時に真っ黒な剣がフランの手に握られ、そのまま突進してきた。

最初からEXボス【フランドル戦】

ガシンツー！！

「何!?

俺はフランの突進+剣の追突を両手で防ぎ、レーヴァテインを分解した。

「次はこっちの番だぜ？」

俺はレーザーと星形の弾幕を同時にバラまく。

「弾幕はパワーだゾ」

「スペルカード発動【禁忌】フォーオブアカインド」

俺の弾幕に掠りながらもフランは紅蓮のスペカを宣言した。

するとスペカ自体が燃え、フランの分身体を3体創り出した。

そして4人となつたフランから次々に花火状の弾幕が展開される。その大きさは大小様々で、正面から見ると避けれん気がしない。

「ククク……全部分解してやる」

迫り来る弾幕を両手で防ぎ、次いで分解する。

しかし弾幕は一向に減る気配が無い。

「よし、右手で決定連打だ」

どうにか左手だけで弾幕を分解しつつ、右手で携帯を取り出し、決定連打をする。

「100連打完了！！原作より遙かに時間掛かつたけど」

標準に大量の弾幕を捉え、決定を長押しした。

すると携帯独特の写メ音が流れ、フランの弾幕がほぼ全て一気に消失した。

「...?」

「それだけじゃないぜ？」

データフォルダに保存したフランの弾幕を選択し、メニューから実体化を選択した。

画像が強制的に消去され、目の前にさつきまで俺を的にしていた弾幕が今度はフラン目掛けて出現した。

突然の事に反応が遅れ、本体が2度被弾、分身体は凄まじい勢いで弾幕に体を貫かれ消失した。

「クソ……スペルカード発動!!【禁忌】クランベリートラップ!
！」

余程頭に来ているか焦っているのだろう、原作とは似ても似つかない程の緻密な弾幕を展開してきた。

が、俺は弾幕が俺の体に到着する前に携帯にあることを入力していった。

十瞬間転移

移動先

紅魔館地下のフランドール・スカーレットの真後ろ。

どうやらこな当てずっぽうな文章でも移動できるらしい。

俺はフランの真後ろへ転移し、肩をついた。

フランは反射的に振り向くと、瞬驚いた顔をする。

その隙に最弱の弾幕をフランの額に当てた。

「コノ野郎ツー！」

「おつと、負けは負けだ、素直に従つてもうらおつか」

「ウルサイ！－スペルカ」

「分解対象、フランドールの狂氣」

俺は一か八が、フランの頭の上に手を置き、分解を使用した。

「うつ

」

「おひと、危ない危ない

籠手の能力の制御は、どうやら上手くこなしたよつだ。

しかし狂氣を分解つて……かなり無茶だが鈴仙涙目だなwww

俺は体勢を崩して倒れそうになつたフランの体を受け止めた。

「あ？」

急に体がふらふらしてきて、視界が紅に染まつた。

「遅……かつた……か……」

多分、フランに『破壊の眼』を使われてたんだが……急速に視界
が暗くなり……暗転

複数同時対決【レミコア&パチュー戦】

「…………だ……しようね」

「ですが…………は？」

「問題無いわ…………にしても…………が…………ね」

俺は周りから聞こえてくる会話で田を覚ました。

「うへ」

「…………やうやくお田覚めのようね」

「ちつ…………レミコアか」

「あら?私の事を知ってるなんて……誰かの入れ知恵かしら?」

目を開くとまばたき赤い天井が目に入った。

次に横へ目をやると永遠に幼き月」とレミリア・スカーレットとの従者、十六夜咲夜の姿が確認できた。

「知ってるも何も緋想天じやお世話になつたからな

「初対面よね？」

「一応。俺は鬼澤颯、あんたはレミリア、そっちが咲夜さんだろ？」

「なんで咲夜がさん付けで私が呼び捨てなのよ？」

「いや、咲夜さんはさん付けしなこと。レミリアに限っては一時期様付けしてたけどうう～言うから止めた」

「う～う～？ そんな事言つた覚えは無いけど……そんな事はどうでもいいわ、この際あえてどうやつて地下に侵入しあの扉を破壊したのかは聞かないから一つ質問に答えて」

「内容によるが……」

「あの子に何をしたの？情緒不安定だったのに今は凄く落ち着いてる。それどころか何故か貴方の事を気にかけてる状態」

「細かく説明すると長いから多少ははしょるけどって　俺の籠手は？」

「どうぞ」

妖精のメイドが俺の籠手を運んできた。

「サンキュー、この籠手の能力…幻想郷風に言つと『念じた物事を分解する程度の能力』でフランの狂氣を分解した」

「物に能力が宿るなんて聞いたこと無いけど……それより感情の類まで分解出来るなんて……」

「それだけじゃない、こいつは俺の意思以外で壊れることもないし

「例えばの話だがレミリアのテーモンロードを真っ正面から受け止めても体勢一つ崩さない」

「へ～え。大方分かつたわ」

「それだけ言つとレミリアは部屋を出よつとする。

「それだけでいいのか？」

「話す氣があるなら先に傷を癒しなさい」

そしてレミリアが部屋を出ると咲夜さんが話しかけてきた。

「此度は本当に有り難う御座いました。妹様がなんだか鎖から解放されたように元気なんです」

「タメ口で構わないよ。フランは何処に？」

「妹様なら地下に居ます。それと扉は普通の物に取り替えました」

セイジが今更ながら扉を壊したことに対する付いた。

「ほんとこすこません……勢いとは言え扉壊しちゃって……」

「気にしないで下せー」

咲夜さんは一瞬微笑むと、瞬で姿を消した。

「俺は泊まつていいのか?」

その独り言を聞くものせぬ、夜は更けていった。

翌朝。

多分朝5時ぐらい、空腹で田を覚ました。

「昨日から何も食つてないから腹減つたな」

体調が昨日に比べ、軽くなつてゐるのを確認し、籠手を嵌める。

そして空中をふりふり飛びながら部屋を出、廊下を進んだ。

「あ、わっしゃん発見」

廊下の先で窓拭いてる咲夜さんを見つけた。

「随分早いっすね」

「朝食等の準備が有りますので」

「手伝おつか？」

「怪我してるんですから無理しないで下をい」

「鏡がないからわからないんだが俺の怪我って何なんだ？」

「額に包帯が巻いてあるのがわかりませんか？」

予想ですが妹様の能力によつて額を抉られたんでしょう？

「成る程、納得した」

「朝、」飯とかどうします？..

「泊めて貰つといて難だけど風呂に入つて良いかな？流石に昨日から入つてないと臭いし」

「そうですね、ちゅうだしの真上あたりに浴場が有ります

「ありがとうございます」

咲夜さんと別れ、階段を探して館内をうろついていたら当然が如く迷った。

「予想通り杉ワロタ」

俺は数分間迷い、ようやく階段を見つけて浴場へと向かった。

脱衣場で昨日から着っぱなしの服を脱ぎ、腰にタオルを巻いて、浴場に入った。

カラカラカラ~

「.....。」

「。」

フラグは回収したよ

(。 。)

(・ ー・)

カラカラカラ～ガタン！～

「ふう。 良い絵だった」

「いいやあああああ～！～！」

突如、後ろから悲鳴が上がり全身から嫌な汗が出てきた。余計臭い。

いやほら温泉とかの定番じゃん？入つたら裸の女の子がポツーンと一人居る現象。湯気で（ズツキューン）とか（見せられないよ！ー）とかは隠れるけど。

まあ要は何が言いたいかつてーと、浴場のスライドドア開けたらす
っぽんぽんの小悪魔が居ましたとや。

数分後。

悲鳴に駆けつけた咲夜さんと着替え終わった小悪魔の前で土下座している少年の姿が…そこにはあった。

はい、私は。

「不慮の事故です。すみません」めんなさいピンポイントは湯気で見えなかつたから大じょぶほあ

—————つ／＼————

赤面しながら俺の頭をげしげしと踏みつける小悪魔。正直痛くも痒くもない。

「本当にすみませんでした。まさか中に小悪魔様が居るとは微塵も
思いませんでしたはい言い訳ですすいません」

「小悪魔だつたから良かつたけどお嬢様だつたら死んでいましたよ
？」

「よ、よくななんかああありますん！…」

「落ち着きなさい。悪魔の端くれでもあなたは悪魔。たかが人間に
裸を見られた程度で騒がないの」

「あの～長くなりそうなら先に風呂に入つていいですかね？」

現在俺は腰にタオル一枚の格好。当然このままだと風邪を引く。

「いんな見苦しい格好のままだとどうかと思つんで」

「「あつ」」

何故か一人して顔を赤くして目を逸らす。

「あの～？」

「は、早く入ってきて下さい……」

「そ、そうですよ……！」

これ以上ここに居るのは危険と判断し、俺は大浴場へ逃げ込むようにして入った。

それから更に数分後、脱衣場に戻ると、何故か俺の服が消え、変わりに執事服と紙切れが置いてあつた。

「なになに……『男の子用の服はそれしか無いから我慢して下さい』B
Y咲夜』」

俺は仕方なく執事服に袖を通し、脱衣場を後にした。

「大変です、正面門が突破されましたー！」

「直ぐに衛兵を。私も直ぐに向かうわ」

廊下に出た途端、咲夜さんと息を切らした妖精メイドが会話していた。

「わかりました、直ぐに衛兵を向かわせますーー！」

「相手はたかが巫女一人ーーお嬢様に何かあつては申し訳が立たないーー！」

「待つて下さい咲夜さん」

俺は明らかに修羅場な雰囲気の会話に割り込んだ。

「実はその巫女…俺の友達何です。ですから俺に任せて下さい」

こんな所まで来て靈夢と魔理沙に突破されてレミリアを倒されちゃ
適わない。

あ、咲夜さんも一応危険人物か。

俺は携帯を取り出し新たな武具を創ることにした。

分類 眼鏡

強度 壊れない

能力 装備時、自由に結界と魔法陣を操れる。

見た結界の種類と破壊方法が判る。

見聞きした魔法陣、魔法、呪文の種類と効果が瞬時に判る。
見た相手の戦闘力、弱点を把握できる。

度数 千里眼を取得できるレベル

スカウターに近い www

てか度数大丈夫か www

出てきたのは一見ただの黒縁眼鏡。それが俺の視界と重なったとき、瞬時に靈夢が居る場所を理解できた。

「桜涙曰 wwwんじや行つてきます。それと妖精メイドは退避させて。巻き込んじゃつたら悪いし」

「しかし……」

「心配すんな。俺はフランに勝てたんだぜ？たかが靈夢ひとり……
…大丈夫だ、問題無い」

やべ www フラグ建つた www

すぐさま籠手を装着し、妖精メイドと入れ違いながら正面玄関に向かつた。

「見つけたぜ」

正面玄関に到着すると、紅白色の巫女が一人居た。どうやら奥へ進もうとしてるらしい。俺は2階から飛び降り行く手を遮った。

「誰よあんた？あの門番みたく邪魔する気？」

「悪いが吸血鬼は譲れないぜ？」

「！」とは邪魔者ね。强行突破させてもらひわ

「！」いつが破れたらな

「へ？」

俺は靈夢の田の前に多重防衛結界を張り巡らせた。

「時間稼ぎにしかならないが……」いへり靈夢でも半田は掛かるだろ
~~~~~

「」こんな複雑な結界を一瞬で……

「安心し。後日ちゃんと吸血鬼を紹介するから。靈夢に先を越され  
る訳には行かないんだ」

「あんた名前は？」

「すまんすまん。鬼澤颯だ、以後お見知り置きを博麗靈夢」

「私見ての通り巫女をやつててね、博麗神社に仕えてるんだけど……」

「だから後日ちゃんと連れて行くつて。それと出来れば霧雨魔理沙  
にも忠告じごてくれるないか？」

「嫌よ、めんどくせ」

「お賽銭入れるからや」

「OK了解したわ。全力で止めるわ」

巫女単純www予想通りだがww

「じゃ頼んだぜ」

「裏切つたら地獄の底まで追いかけるからそのつもりでね」

巫女怖っ！！！

とりあえず俺は理由作りのために地下へ向かった。

「フランちゃん。居るかい？」

「鬼澤颯？」

「えいえい。ちょっと失礼するよ～」

俺は戸を開き、フランの部屋へ入った。

「フラン。ここから出たい？」

「本当は出たい……でもねえ様が私には危ない力が宿ってるから駄目だつて……」

「なら……まずはそのふざけた幻想をぶち壊す……ついわけで付いて来て俺の力になつてくれない？」

「えつ？ええ！？」

フランちゃん絶賛混乱中。

「本当は出たいんだる~。安心しろ、昨日は酷こじとしちゃったけど  
これからは俺が守るから」

「ほんとほんとに出れる?..」

「もうひと。フランさんの気持ちがあればね

「じゃあ約束してくれたら付いてく

「ここよ~」

「フランと兄妹になつて?..」

「ああ。その程度お安い? よう……ってええ!~?」

「やつた。これからはお兄ちやんて呼ぶね?」

「」

しまつたあああああ！

こんな所でフラグ建てちまつたあ  
!!!!!!

どうすんのこね！

ねえ神様と云ふれはいしの！

突如、携帯から着信音が流れるとメールだった。

『 フラグ建てすぎたならハーレムでいいじゃないか。 それが許され  
る世界なのだからな 』

良い」と書つてくれんじゃねえかあああ――――――

「やつぱりダメ?」

「オールオッケー音」

フランと俺は部屋を出で、フランの案内の下広間へ向かった。

「レミリア、入るぜ

「どうぞ。」

俺は分厚い櫻の木で出来た扉を押し開き、一歩踏み込んだ。

そこに居たのは朝食を取つてゐるレミリアとパチュリーの姿があった。

二人は後ろのフランを見て目を丸くして驚いてゐる。

「つー？ これはどういう事？」

「一晩泊めて貰つた恩を仇で返すよつて悪いが…… フランを自由に

「ひー

「何故? アナタもその能力で額に傷を負つたのよ? 普通ならフランを助けようなんて思わないんじゃない?」

「生憎、俺はもう普通じゃないんでね」

「和解よりも血。そつ言いたいの人間?」

「確かに、理にかなってる。力こそ全て」

「2対1は卑怯ね、私も加勢するわレミィ」

こつじて俺とフラン対レミリア&パチュリー戦が開幕された。

「先にルールを決める。残機は3。スペカの使用制限は3。味方から当たり判定は無し。掠り判定は無効だ」

「この小説での掠り判定有無は、

有効ならば掠つても被弾扱い。無効なら掠つても被弾扱いされない。

」

「問題ないわ

「問題無しね

「では開始！！」

俺の開始宣言の直後、3人はいきなりスペカを発動した。

「スペルカード発動！！【禁忌】フォーオブアカインド」

「スペルカード発動、【金符】メタルファティーグ」

「スペルカード発動！！【神罰】幼きテーマモンロード！！！」

三者三様のスペカ宣言をし凄まじい密度の弾幕が展開され始めた。

レミリアが使用したスペカにより、何本ものレーザーが飛び交う。

パチュリーのスペカにより8つずつに分裂する弾幕が放たれる。

挙げ句味方なのにも関わらず視界を埋め尽くす程の紅弾をすぐ側で放ち続けるフラン×4。

弾幕多杉ワロタ www

「いや確かにスペカ使つて良いことは言つたけど開幕は通常弾だろ常考」

「デーモンロードを受けても体制一つ崩さないんじゃないの？」

くそ、レミがドヤ顔で上から田線とか……可愛い過ぎて死ねるwww

「詰めが甘いな」

「？」

「ひどなことも有りうかと100回連打済みなんだよーー！フランー！  
！早くスペルブレイクしろーー！」

「わ、わかった！！」

「この小説でのスペルブレイクは只単にスペカの効果切れを示します。防御がさがつたりダメージ補正が入つたりするわけでは有りません」

やつらになり、一際多く弾幕を放ち、分身を消したフラン。

「それでいい

「じゃ、全部返却するぜ！」

上からレミリア、パチュリーがお送りしたビックリボイス！ 脳内で再生してくれ！！ www

「えつー！？」

「何ー？」

と音つきショボい音と同時に全て消えた。

カシャツ！

「ヤーヤが止まつませんwww

以前まで迫った弾幕が、

データフォルダから今し方撮つた虹色の水玉模様しか写つていない  
画像を実体化した。

「パチエー！相殺するわよー！」

「了解」

「スペルカード発動！【紅符】スカーレットマイスター！」

「スペルカード発動【火土符】ラーザクロムレク」

お次は紅魔郷のレミリア戦に置いて俺が一番ボムを使う超密度のス  
ペカですねwww

パチエのは確か軌道が変化する弾幕だったな。

そんな呑気な事を考へてゐると、弾幕と弾幕がぶつかり合い、小規模の爆発が起きていた。

「フラン！－！弾幕を追加で撃つぞーー！」

「うん！！スペルカード発動！【禁弾】スター・ボウブレイク！！」

うは WWW観客ぶつ飛ばしまくったスペカ k t k r ! !

フランから様々な色の弾幕が大量に放たれ、レミリアとパチュリーに追い討ちを掛けた。

俺も多量の弾幕を放つ。

その後30秒程持久戦が続き、どうやらパチュリー、レミリアの順にスペルブレイクしたらしい。

「任せてレミィ。スペルカード発動、【火水木金符】賢者の石」

やばい……パチュリーが賢者の石使いやがった……

ハ○一ポツ○ーがあ！！ｗｗｗ

「冗談はさておき弾幕を放ちながら余裕の100回連打を達成した俺。

取るべき行動は一つ。

「はい残念」

俺はパチュリーの出した石を全て写真に収めた。

「へつ……」

フランのスター・ボウブレイクによりパチュリーが3回被爆し、離脱

した。

「空気的に俺も離脱だな」

相殺仕切らなかつたレミコアの弾幕にワザと3度被爆し、俺もリタイアした。

俺のリタイアと同時にフランのスター・ボウブレイクも終了した。

「ねえ様……」

「フラン……」

「私が勝つたら……本当に自由にしてくれるの?」

「……」

「心えてよねえ様ーー！」

「あなたは何も分かつてない……」

「何がーー？」

「私がフランを閉じこめたのはあなたを守るため。でも……それだけじゃなかつた……」

「…………」

「心のどこかでフランを怖がつてたのかも知れない。だけど……」

「もうこことよ、ねえ様」

「えつー？」

「フランはねえ様が好き……だから怖がりなみつと……フランの好きなは……変わらない」

徐々に涙を流しながら話すフランに田を丸くするユリコア。

「ねえ様は……ひぐり……フランの事……心の想ひ物のへ…」

「私もフランが好き……そんなの……当たり前じゃない…」

「じゃ……あ……お願い……フランが……勝つたら自由にして…」

「それ叶…」

「あの時……は大丈夫だよ……お兄ちやんが……居るから」

「お兄ちやん?」

「お兄ちやんと約束したの……フランのお兄ちやんになつてつて。」

それで……守つてくれる……つて」

「アハ……ならもう……何も言わないわ、全力で来なさいフラン…」  
「…」

「うん……」

「スペルカード発動……【神槍】スピア・ザ・グングニル……」

「スペルカード発動……【禁忌】レーザー・ヴァテイン……」

## 決戦!!【フランデール対レミリア】

フランは漆黒の剣を、レミリアは紅蓮の槍を手に、翼を広げ、物凄い早さで飛び交った。

2つの紅い影が交差する度に発せられるかん高い金属音と火花。

「……」にはお互い弾幕を張り巡らせ、どんどん窮屈な戦いになつていく。

そして激戦の最中、レミリア、フランの両方共2度被弾し、尚も攻撃の手を休めず、切り、突き、なぎ払い、振り下ろし、激戦は長いこと続いた。

やがては弾幕を出す余裕も無くなり、ただの肉弾戦と化し、遂に決着が付いたとした。

「ハア……ハア……」んなに本氣で戦つたのはいつぶりかしら。……」

「ハア……ハア……フランもねえ様と遊ぶの久しぶりで嬉しかったよ?」

お互いに肩で息をしながら対峙する。

「終わりにしましょ」「う

「やうだね」

レミコアはグングニルを全力投球した。

フランもレー・ヴァテインを全力で振り下ろした。

レミコアの投げたグングニルは光の軌跡となり

フランの振り下ろしたレー・ヴァテインは紅い衝撃となり

それらはぶつかり合い、靈力が尋常じゃ無い量溢れ出し、大爆発を引き起こした。

立ち込める爆煙の中、息を飲んで見守る俺とパチュリー。

煙が晴れるとそこには傷だらけになりつつも立つレミリアと倒れたフランの姿があった。

「俺達の負けか…」

「負けたわ

「え?」

バタリとレミリアも倒れ、氣を失う前にレミリアはこうつ囁つた。

「最後の爆発の前……私のグングールは威力で押されてた……でもフランはワザと威力を落として均衡させたみたい……ほんっと……バカな妹ね……」

レミリアはそのままカクンと意識を失った。

「バカはねえだろ 実の妹に」

バタン！――！――！

背後で扉の強く開かれる音がし、振り返ると靈夢、咲夜さん、初登場の魔理沙が居た。

「お嬢様！――妹様！――！」

「遅かつたわね……」

「ショーガないなあ」

「あんたたち…………また来たの?」

咲夜さんはフランとレミコアを抱えてから消えた。

俺は靈夢と魔理沙に話し掛けた。

「あの結界……よく壊せたな

「アタシのファイナルマスター・スパークと靈夢の夢想天生でぶち破つたぜ」

「堅すぎでしょあの結界……それで漸くビビが入って私がこじ開けたのよ」

「流石だな。魔理沙の案か……俺は鬼澤颶。よろしくな魔理沙」

「おひ、よろしく。つてなんでアタシの事知ってるんだ?」

「幻想郷で魔女といつたら数える程しか居ないだろ?」

「つまり私が有名ってことだな!…」

「泥棒でね(ボソッ)」

「死ぬまで借りてるだけだぜ」

俺達が話してると、妖精メイドが一人来て、こう呟いた。

「メイド長からの伝言です。

2人は明日になれば目を覚ますそうです。

颶様は厨房に行つて下さい。

もうお昼近いですが朝ご飯が用意されます

「何から何まで悪いな

「それと博麗の巫女と霧雨嬢はメイド服がお尻りにならざるまでここで待つていて下さい」

「面倒ね

「問題ないぜ」

「では私はこれで……」

俺は靈夢達と別れ、『Kitten』とプレートが掲げられた  
室を探し当て、遅めの朝食を取ることとした。

## 一週間の休息

俺は朝食のトーストとベーコン、スクランブルエッグを食べ終わり、昨日使っていた部屋へ戻った。

奇跡的に迷わずに部屋へと到着した俺は部屋のドアノブに手を掛けた。

その時、携帯の着信音が鳴り響いた。

因みに着信音はもう歌しか聞こえないだWWW

携帯を開き、メールを確認すると、

『褒美としてアプリの強化と追加をしておいた。

一週間の猶予をやる。その後は次の世界だ、その世界の悪が葬られたら幻想郷に戻れる』

by神

ふと思つた感想。

GANTSUか！――！

俺は返信ボタンを押し、こう返した。

『紅魔郷はこれでクリアなのか？俺はフラン、レミリア、パチュリーに勝つただけだぜ？』

直ぐに返事が来た。

『この場合、レミリアがフランドールを自由にする事を許した。それだけでレミリアは計画を中断した。つまり一応異変は解決された事になる。

因みに全ての世界の時間は統一している、別世界へ行き3日滞在したら幻想郷でも3日経っていると覚えておけ』

by神

成る程。要はフラン助けたから万事解決ってわけか。

よくよく考えると俺レリコア倒して無いじゃん。

つと そんな事考てる場合じゃなかつた。  
ミスティアだミスティア。

早く会わねば時間が無い……

俺は窓から外へ飛び出し、中庭を抜けて門前へと来た。

「おい美鈴！……！」

「ね、寝てませんよ……つてあなたどうして紅魔館から出て來たん  
ですか？」

「お前が寝ている隙に入った。それから咲夜さんこの事をバラさ  
れたくなかつたら一つ頼みを聞いてくれ」

「内容によりますがわかりました」

美鈴はこれからどんな仕打ちを受けるのか若干怯えながら生睡を飲んだ。

「簡単な事だ、妖精メイドでも咲夜さんにでも誰でもいい、『今日中には多分戻る、服は昨日使った部屋に置いておいて下さい』と伝えてくれ」

「わかりました。えっと」

「鬼澤颯だ、宜しく紅美鈴」

「はう……私の名前知ってるんですか?……凄く嬉しいです……」

中国がデレたwww  
らしくないwww

「因みに俺見てのとおり紅魔館の短期執事だからよろしく美鈴先輩」

当然、次に入るときのための口実だ。

「はい……お気を付けて……！」

よし、美鈴は完全に騙せた。

俺は紅魔館を後にし空を飛んだ。

「湖発見！？発見！？目標を駆逐する！？」

高度約500m、眼下に映る日本じゃまず見られないであろう素晴らしい景色の中、紅魔館から数百m離れた場所にかなり大きな湖を見つけた。

千里眼により湖の上で無邪気に戯れているチルノ、ルーミア、大妖精を発見し、俺は一直線に飛んでいった。

「やつぱりあたいたらセイきょーね」

「そーなのかー?」

「チルノちゃん、カエルさんを凍らせちゃ駄目だよ〜〜

上からチルノ、ルーミア、大妖精。

どうやらチルノは蛙を凍らせて遊んでいたようだ。大妖精がオドオドしながら止めよつとしている。

「へおおおひあああーー蛙を凍らせて遊ぶんじやなあいーー」

「うわーー？」

「へ？」

「そーなのかー」

俺はチルノに向かつて突つ込み、手を抜いたラリアットをかました。

「なにすんのよせこきょーのチルノさまに向かつてーー」

体勢を崩したチルノをすぐさま羽交い締めにした。

「うせ?、つと...大妖精、聞きたい事がある

「ふえ？」

「そーなのかー」

「名無視！－多分ループするから。

「あんた大ちゃんに変なことしたらムグウ！－！」

「俺は鬼澤颯、怪しい者じゃない。

ミステイアを捜してるんだが何処に居るか判るか？」

喧しい？の口を塞ぎ、話を続けた。

「うーん……ミステイアちゃんなら今日の夕方に屋台出でつて言つ

てたから多分今は準備中だと思います」

「そつか、ありがとな。

その準備してる場所はわかる?」

「ここから北に行つた場所に人里が有るんですけどその近くの筈です」

「わかった、ありが――」

「ふはあ、スペルカード発動!! 【氷符】パーフェクトフリーズ!!

羽交い締めにしている?の口に当っていた手を緩めた瞬間、ポケットからスペカを取り出し一瞬で発動させやがった……

「ちよ……おまえ……」

でも分解www

所詮？だ、やはりeasyレベルのスペカしか発動しなかったwww

多量の氷塊をばらまくチルノ。当然当たる前に籠手の能力で分解した。

「いざれまた会おうチルノよー！」

俺は隙を見計らつて携帯の瞬間移動を使い、『人里』と入力し、転移した。

「消えた！？」

「そーなのかー」

一瞬で周囲の景色が変わり、賑やかな商店街に変化した。

「あんた今いきなり現れなかつたか！？」

流石に道行く人に見られたらしい、若干不味い。

「透明になるマジックですよ」

「魔法使いなのかあんた！？」

話しかけてきたのは中年の鉢巻きをしたオサーーンだ。  
ここは嘘をついとこいつ。

「そりだが？」

「ちよつと手伝ってくれないか？お駄賃は払つから」

「何を？」

「いやあ、実は俺大工やつてる茂野じがのって言うんだが木材が不足して困ってるんだ……」

「俺にどひしどと？」

「魔法かなんかでちよちよちよいつと木材を出せないかね？」

「ふーむ、俺に『』を木に換える力は備わっていないのだが……

携帯を取り出し、武具の召喚を起動した。

分類 杖

強度 僕が消えろと言つと存在が消えるがそれ以外では破壊不可。

能力 持っているだけで魔法により木を生成出来るようになる。

出て来たのは言つなればただの太い枝。葉は着いてないが……

「場所は？」

「」

俺はオサーンの案内の下、作業場まで來た。

「ん？ 茂野、その小僧は？」

「失礼な事言うんじゃねえ！－！」人は魔法使いだ－！足りない木材を出してくれるそなだ

「そいつあ助かるーー。」

「こへりへれんの?」

「せうだな、杉の木を元の形のまま400k出してくれ。そした  
ら10万円出すわ」

(ふん……こへり魔法使ないと無理原型のまま出すなんて無理だ  
わ)

「10万ね、おく

俺は杖(枝)を右手に、作業場の窓に向かって意識を集中させ  
た。

すると地面から「ピロピロ」と一本の木が生え、どんどん大きくな  
つた。

「これでいいか?急いでるから早くしてくれ

「すげえーー！」

「なつーー？」

茂野さんは事務所のような場所に入り、封筒を持ってきた。

(バカな……言の葉も無しに杉の木を生やしただとー？それも立地条件の悪いこんな場所にー？)

それを受け取り、中身を確認した俺は一気に至高アツコウへまで飛び、千里眼を使った。

「おお……漸く見つけた……廻のミスティア」

千里眼で人里周辺を隈無く探すと、屋台の前で何かをしているミステイアの姿があった。

俺は一直線にそこへ飛び、ミステイアの真後ろに着地した。

「ミステイア……」

「つー？」

いきなり声を掛けられ、肩をビクッとさせ驚きながらミステイアは振り返った。

「誰……ですか？」

「俺は……鬼澤颯……えと……」

「『』みんなさー、屋台は夕方からなの」

「ルーフィヤない……その……」

「？」

「ミスティア…………俺と結婚してくれー！」

「はい？」

「ハツ…………つい本音が！？」

くそ……これで嫌われたらどうするー?過去の俺を殴ってやりたい

「クスッ」

「！？」

笑われた！－マジビうすんだよ－－」の状況－－

「こんな私を好きになるなんておかしな人ですね……私、妖怪なのに  
に

「そんな事は知ってる。夜雀の怪、ミステイア・ローレライ……だ  
ろ？」

「それを知ってるのにどうして私なんかを好きになつたの？」

「えっと……それは……心からミステイアに惚れてるから……だ」

言つて恥ずかしい。

顔から火炎放射できんじやね？

「でも私……人間と……つて……どうなんだろ……？」

「すまん、やつきのは……」

「こんな私で良ければ……でも……いきなり結婚は……」

「な、ならーー！友達からでいいーーこきなり出会い系に頭に言われても困るセリフだつたろ？」「ーー」

「友達……」

「ああーーえと……駄目ですか？」

「わかつた」

「ありがとづ」

(ヨツシヤアアアアアアア)

「さうかミスティアと関係を持てた……今なら死んでも……いや、まだ早い……！」

「あっ、それ手伝おうか？」

「えつ？ いいの？」

遠くからだつたからわからなかつたがどうせひながに皿を刺して  
いたらしい。

下準備つてやつか。

「じゅあそれで手を洗つて来て」

「おひ……あつ、そつだ消えろ……。」

消すのを忘れていた杖を消し、俺はミスティアに指さされた屋台に備え付けてあるボトルから水を出し、籠手を外し、置いてあった石鹼を使い、手を綺麗にした。

「じゃあこの捌いてある八田鰻に4本串を刺して?私は下焼きするから」

「了解した」

言われた通り鰻に串を刺していき、作業する」と一時間。

だいたいの下準備中が終わり、現在3時頃だ。

ミスティアが焼いた八田鰻を手伝ってくれたお礼として一枚くれた。

「つまつ!! 特にタレが美味しい!!」

「あつ……山椒使つ..」

「いや、そのまま大丈夫」

素でつまかった…

「まだ結構時間あるナビジつあるんだ？」

「へへん……いつも時間は余らなーから…じつじょつかな…」

ふむ、どうやら暇なよつだ。

そうだ、今更ながら追加されたアプローチを見よつか。

「どれどれ……」

## 強化されたアプリ

### 十 弾幕切り取り機能

100回連打を改善し、10秒間決定長押しで一枚撮れるようになります。ただし長押ししている最中は動きが鈍る。

低速移動化ですね……わかります。

## 追加されたアプリ

### 十 簡易式一軒家機能

このアプリを起動するとペンが出でてくる。そのペンド地面に範囲を描く。その範囲から適合した一軒家を瞬時に建ててみる。

正直、パナイ。

### 十四次元ポケット機能

今までに生成した武具を四次元に収納することができるので出し入れ自由。

ドリームランwww

†破壊のゴミ箱

今までに生成した壊れない武具を上書きして破壊する。

要是使い飽きた武具を消せるわけか。

以上だけらしい。

いやあ～神の力すばらしきつス。

俺はさつそく4次元ポケットを使い、籠手と眼鏡を収納した。

「それってケータイって言ひ機械だよね？」

「何で知ってるんだ？」

「以前、夜の屋台に天狗が一人来て確か『姫海棠はたて』って天狗が教えてくれたの。色は違うけど形が似てたから」

「ふむ、是非ともメル友になつて頂きたい……いや、待て、念写でプライベートフォルダの画像を撮られたら……」

俺は神にメールし、念写耐性を希望した所、既に掛かっているとのこと。

「流石神www用意が良すぎるwww」

兎に角暇だ……

うつむ……ゲームが無いとやる」とに困る……

折角ミステイアと二人きりなのに……ん?

急激に心臓が鳴り始めましたよ。ええ。

「どうしたの？顔色が真っ赤だけど……？」

「べべ別に何でもない……！」

一方でミステイアは何か紙見てるし。

「何見てるんだ？」

「な、何でも無いよ……。」

気になる。俺は眼鏡を取り出し、千里眼で覗き見してみた。

「歌詞が。いい詩じゃないか」

「な、何でバレたの！？」

「実はこの眼鏡、透視機能が付いているのだよ~~~~~だからみすちーの服の下も……」

「あやあああー！？」

「冗談だよ~~~~~」

そう言つて目を逸らす俺。

ミスティアの照れ顔とか破壊力テラヤバす！ー

「もっ、颯さんのえっち

」

」

今なら死んでいい。

でかその沙織

色んな意味でNGたわわわ

「その歌詞ミステイアが考えたのか？」

「えと……やうだにど……」

「プリズムリバー三姉妹に頼んで作曲して貰えば？普通に〇〇出せるレベルだと思うけど…」

「しーでいー？」

「CD無かった。兎に角名曲になりそつて事」

「あ、ありがとう//」

照れるなって。田を逸らさないと俺が死んでしまうwww

「じつかじこいつもやる事が無いと暇だな」

「夕方になるまでもまだ1時間ぐらい有るしね～」

「むむ……」

結局何をするでもなくミステイアと暫く話し気付けば口が沈みそうになっていた。

「そろそろ店を開けなきゃ

ミステイアは屋台を後ろから押し始めた。

が、当然俺はミステイアをぞけて屋台を押す。

「そんな…悪いしいいよ…」

「気にするな。俺が好きでやつてるんだ、礼も要らない」

「優しいんだね」

「ミステイアにだけな」

「んーん、何か他の人にも優しそうな気がする」

「そうでもないさ、俺は嘘吐きの臆病者だし」

「優しいに加えて謙虚なんだね？」

ミステイアの楽しそうな笑顔に、俺も自然と頬が緩んだ。

そして人通りが若干多い人里の通りに来ると、車輪を固定し、炭火で鰻を焼き始めた。

ものの数分で数人の行列ができ、みるとうちに鰻は売れていき、6時には全て鰻は売ってしまった。

「凄い人気だな。確かに旨かつたから解るけど」

「でも最近八日鰻の数が減つてきてるからちょっとピンチなんだ」

「取り過ぎは良くないしなあ」

「違うの。前は私や他の人が取り続けていたけど個体数が減らない程度だったの。だけどここ最近湖や川の鰻がやけに早い速度で誰かが大量に取つてるみたいなの」

「成る程ねえ」

そいつを探し出しあつてお灸を据えてやるわ。

「今日も売れるのが早いな」

「じゅも妹紅さん」

「もし」とんギターーーー！」

突如現れたもこたん！！！

ナマモコたんwww

「誰だお前？」

「失礼、俺は鬼澤颯、ご機嫌麗しゆう藤原妹紅さん」

「じゅも、一寧じゅも」

「今日はもう売り切れです。すいません」

「まあまた今度でいいや」

「明後日は居酒屋として湖畔の近くに開いてるんだ良かったら遊びに来て」

「そいつまで。慧音と一緒に飲みに行こう」

そう言い残して妹紅は立ち去り、俺はミステイアと一緒に屋台を方付け始めた。

「何から何までありがとうね」

「だから気にするな、俺が勝手にやつてるだけだって」

「そりだったね」

俺はふと思つた。

ミスティアは何故今日会つたばかりの俺にこんなに打ち解けてくれたのだろうか……  
いや、けしかけたのは俺だが……

その事をミスティアに尋ねると意外な理由を教えてくれた。

「私……そんなに友達とか気軽に何でも話せるような人も妖も居ないから少し嬉しかったの。  
そりやあ常連のお客さんも居るけどあくまで人付き合いだったから  
…」

「そうか……チルノとかは仲が良いんだろ?」

「まあ仲が良いと言えばそうなるけど実際チルノちゃんの無茶に振り回されてるだけな気が……」

「それ言つたら大妖精の方が苦労人な気がする」

「あはは……そうだね。  
でもよく知ってるね？」

「幻想郷に住んでる力ある者達の事は大方知ってる。特にチルノとかは三月精の自機キャラとして優秀な能力を發揮してたし」

「自機キャラ?」

「まあこの世界で言つゲームとはまた違つ感じのゲームなんだけど  
……携帯じゃ出来ないしなあ」

「へえ。ゲームなら香霖堂におかしなゲームがいっぱいあったけど  
……」

「あの禪眼鏡には氣を付けろよ~平氣で幼女を襲つ変態だからな」

「霖之助さんか?」

「やつだ、特に博麗神社での宴会では氣を付けや」

「こつも魔理沙に無理やり酒呑ませられて直ぐに酔いつぶれてるから

大丈夫だよ

「ならいいが……」

俺とミスティアは話しながら屋台を動かせる状態にした。

そして俺が屋台を押しながらミスティアについて行つてるとミステイアが唐突に止まった。

「どうした？」

「困まれてます」

「…………」

俺は無言で携帯の四次元ポケットから籠手、眼鏡を取り出し、装備した。

そして千里眼で周囲を探ると狼の一群のど真ん中に俺とミスティア

が居ることに気付いた。

「わり、気付かなかつた」

「問題ないよ、行こ？これ以上暗くなつたら夜目の効かない人間じや危ないし」

「暗視スコープ創ればおく」

「あんしスコープ？」

「どんなに暗い場所でも見えるようになる眼鏡みたいな物だよ」

「人間にとつては便利なんだろうね」

ミステイアは普通に歩いて進んでいる。

その間、千里眼で様子を伺つていた狼達が地面でのたづひ回つてこるのが確認できた。

「鳥田の能力か」

「ほんと、何でも知ってるんだね」

「まあな」

視界を奪われた狼達は混乱し、俺達を襲う所じやないらしい。

素通りし、そのまま歩くこと約10分、林の中に一軒の家があった。

「ここまでありがと」

「リリがミステイアの家なのか。意外としつかりした家だな」

「意外って何よ～？」

ミスティアは頬をブ～と膨らませて怒った素振りを見せた。

「無理、直視できないwww」

「颯はどうするの?..」

「紅魔館に行かなきやな。服を置いてきてるんだ」

「そうなんだ...」

「また明日来るよ」

「うん。またね」

ミスティアは屋台を家の横に置くと家に入つていった。

俺は紅魔館へ戻るべく空へ飛翔した。

短期執事だと…? またミステイアに会う機会が……

俺は無事何事もなく紅魔館の門前まで飛び、着地した。

「お帰りなさい」

「おう美鈴先輩。起きてましたか」

「し、失礼ですね……」

「悪い悪いｗｗじや頑張つてな」

門を通過し、紅魔館に入ると咲夜さんが出現した。

「今まで何処に行つてたんですか？」

「まあひょこと野暮用で。何か用か？」

「服は部屋に置いておきました。それとお嬢様がお呼びです、広間へ行って下さい」

「用を覚ましたのか

「はい、妹様も。では私はこれで

「待ってくれ！…広間が何処にあるか解らない

「仕方ないですね。では着てきて下さい」

俺は咲夜さんの案内により広間前まで来た。

「では私はやうねばいけない事があるので

咲夜さんは一瞬で姿を消した。

俺は扉をノックした。

「俺だ」

「入って」

言われた通り扉を開けた瞬間、腹部に走った衝撃により俺は一瞬弱吹っ飛ばされた。

「ぐ……苦しい」

「遅いよおーお兄ちゃんーー！」

扉を開けた瞬間に走った腹部の衝撃はフランによる抱きつき攻撃だった。

「起きれないから退いてくれフラン」

「えへへ、やだ

「俺はレミコアと話しがあるんだ、後でこくらでも付き合つてやるから今は退いてくれ

「むう……わかった

渋々といった様子でフランのなかなか強い腕力から解放され、立ち上がった。

広間へ入り、椅子に座るよひ足された。

近場の椅子に座り、話を聞いたとしたその時、膝にちょこんとフランが座ってきた。

正直、フランのトレスが半端じゃないwww

「何の用なんだ？」

「ただ、お礼を言いたいだけよ。今日せ…フランと仲直りするきっかけを作ってくれてありがとうね」

「まあ礼を言われるほどどの事じゃない、欲で行動したまでだ」

「なんの欲よ？」

「そういうのは言えない。まあ強いて言い換えるなら俺が幻想郷で生きるために…かな」

「よくわからないわ。あなたの事が。何せ運命が見えないのよ」

「やっぱりか、幻想郷の外の世界の運命は見透かせないみたいだな」

「外の世界？」

「まあいい。話は終わりか？」

「私に出来る事があつたら何でも言つて。恩返しの一つも出来ないと紅魔館の主としての恥だし」

「やうだな、一つ聞きたいんだが

「何でも答えるわ」

「フランを幽閉した理由は……やっぱりハ雲紫が絡んでるのか？」

「やうだな？ 何でそんな事知つてるのーー？」

「まあ気にするな。それとフランの事が……多分、俺が分解した狂氣は……一時的な物だと思うんだ」

「じつこいつ」と……。

「ストレスが溜まればまた再発するってことだ。

根っこから分解したらそれこそフランの人格まで影響しちまう。

これ以降ストレスがなんかしらのきっかけで発狂するかも知れない」

「成る程」

「対策としてはストレスとかを溜め込ませないかあるいは俺が微弱な狂気を分解し続けるかだな。  
もつとも後者は何よりフランが望まないだろうから」

「あら？ なら問題ないわね」

「何がだ？」

「だつて、兄妹でしょ？  
ずっと一緒にやない」

( ^ ^ ) ギクウ

しまつたああああ！！！  
すっかり忘れてたあーーーー！

ヤヴァアイ…余計なフラグ建てすぎた……

「それが嫌ならいつそ紅魔館の執事になれば？」

「悪いが俺は不定期にこの世界から消えたり現れたりする存在だ。  
今日から一週間後、消える。次にいつ現れるかなんて想像もつかない」

「随分と不安定な存在なのね」

「連絡を取る方法はある。  
妖怪の山に住む姫海棠はたてつて言う天狗に頼めば会話ぐらいは出来る」

「知らない名ね」

「射命丸文に聞けば分かる筈だ」

「今度焼き鳥にあらひて並びて齧してみるわ」

「ははは……程々にな……俺はそろそろ部屋に戻りたいんだが……」

「じゃあこれは恩を仇で返した罰、一週間の短期執事になりなさい」

美鈴に言つたことが本當になるなんて……

拒否なんか出来るはずもなく……

「わ、分かった」

「では戻つてよろしく……」

クソッ、ユミリアのドヤ顔が心に染みるぜ……

俺は席を立とどとして膝に居座つているフランを見る。

「えと……部屋に戻りたいんだナビフクンサウルス

「ええー!? 何でー!?

「こーセー……の……

「後で遊んでくれるんじやなかつたのー?」

俺……アルツハイマーかもしけない…

すっかり忘れてた…

「わかつたわかつた、俺かなり腹減つてるから夕飯食べてからでいいだろ?」

「お腹減つてるので? ジャあフランと一緒に食べよう。」

「食べてなかつたのか？」

「うさ

一向に退く気配の無いフランをお姫様抱っこで持ち上げ、厨房へ向かつた。

厨房には咲夜や他の妖精メイド達が居て、夕飯準備の真っ最中だった。

「あどうれぐらご出来ますかね？」

「残り4分23秒です」

細かいなおい。

しかし流石咲夜さんだ。

田にも止まらぬ早技で次々に料理を作つていつてる。最早神レベル  
www

「と云うわけで広間に戻つていて下さい。お嬢様は貴方にも夕食の  
席を用意しても良いと仰つたので」

なんか理由付けられて追い出されたよ。

忙しいみたいだからほっとくか。

「広間に戻りたいんだが…」

此処までの道のり忘れました www

結局フランの指示で右へ左へで広間に到着した。

「この館、広杉です。

広杉とか誰だwww

「べつやら咲夜に追いつかれてようねwww」

「分かつて行かせたな？」

「なんの事かしら？」

畜生！…レミリアは根っから意地悪な奴のようだ…！

その後フランをなだめ、どうにか隣の席に座つて貰つ事で妥協し、  
カートに乗ってきた夕飯を頂いた。

「いやあ……これいいっスね

「それはガゼルのステーキです」

ガゼルって食えるんだ、初めて知ったよ。

まあ鹿っぽいし平氣か。

レリコアとフランに限っては赤い料理しか食つてないし。

やつぱは血の色だよな……アレ……

「食後のデザートと16年物のテキーラです」

俺未成年なんだけど……

まあビージーの巫女も常識に捕らわれてはならないとか言つてゐるといふ。

俺は人生初の酒とショートケーキを楽しんだ。

「意外にサクサク飲める物なんだな」

「あんた酒に強いのかしら……常人なら2～3杯で結構酔つんだけどそれ何杯目?」

「そうなのー?グラスで8杯目なんだけど……」

ラベルを見せて貰うと度数52と書いてあった。

「52度って高いのか?」

「ねえ様、お兄ちゃん酔わないよ?」

「ここまで酒に強いなんて計算外ね、下手したら喉が焼けるレベルなのに」

「は？それって……」

「ねえ様がお酒で酔っぱらってたら向しても明日には忘れてるって言つたの？」

「明日レニアの命だね。うん」

「じょ、[冗談よーー]冗談ーー！」

流石に身の危険を感じたのか慌てて弁明するレニア。

「どうじょっかなーー！コアが意地悪するから紅魔館から出て行つ  
ちやおうかなーー」

「ね・え・様・？」

「いつこの事続けるとフラン発狂すんじゃね？」

「【禁弾】……スターボ」

「わーわーーーもう意地悪しないから許してスペルカードを仕舞いなさいーー！」

「本当にいい？」

「ち、誓うわ」

「安心しろ、用事で出て行く意外、一週間はここに居るから」

「わかった」

流石、最終鬼畜妹フラン

「ワイワイwww

俺は食べ終わったので部屋に戻りついたその時、怪力で腕を掴まれた。

やつぱり逃げられないよね~

「フランの部屋に行ってるから。食べ終わったら一緒に遊んでやるよ」

「ウソ吐いたら怒るよ。」

泣々といった様子でフランは俺の腕を放した。

嘔吐いたら死にそうなので俺は地下にあるフランの部屋へ向かった。

地下へのルートは覚えていたので、普通に到着した。

「そういう地下2階って行ったこと無いな

フランの部屋は地下1階にあり、さらに降りる階段があった。

興味本位で降りると古びた木の扉があるのみだった。

「大丈夫かな」

木の扉を押し開くとそこは倉庫になつていて、ワイン瓶や酒樽などが所々にあった。

「埃臭いな……」

俺は木の扉を閉め、階段を登つた。地下1階にはフランが既に来ていた。

「下で何してたの？」

「何があるのか気になつたからちょっと覗いただけだ。酒しかなかつたが…」

「あそこは……お酒だけじゃなくて…もつと怖い化け物が居るんだよ？」

「化け物？」

「そんなことよつツリソと遊ぼ？ 何して遊ぶ？」

化け物？ あそこには埃を被つた酒樽とか酒瓶しかなかつたように見えるが…

兎に角触れではマズそつなのであえてスルーすることにしてや。

「トランプとかあるか？」

「どうんぷ？ 何それ？」

「どうやら幻想郷にはトランプは存在しないらしい。」

「色々な遊びが出来るカードだよ」

「面白そうだね」

「面白いんだよ」

俺は携帯の武具生成機能で、できるかは解らないがトランプの生成を試みた。

名称 トランプ

分類 カード

強度 ただの厚紙

能力 いかさまが出来ない

使用後自動シャツフル

無くなつても集まつてくる

枚数 joker 2枚含む一式

どいつもやら成功のようだ。

トランプがバラバラと床に落ちた。

ケースぐらい用意しろよ…

落ちたトランプを裏表の統一をしながら一束にまとめた。

「「れがどりんぶ?」

「そうだ。2人で出来るゲームはポーカーとか七並べとか… ブラックジャックぐらいだな」

「ブラックジャック…お医者さんの?」

「何故知っている…?」

「パチュリーの図書館にあつたよ? 確かまんがつて言つ繪本の中に

よし、暇なときは図書館に行こい。すげー気になる。

「で、何する?」

「じゃあブラックジャック!-!」

「ルールを説明するぞ、トランプを2枚以上引いて描かれている数

字の合計がより21に近い方が勝ち。因みにAは1でJが11、Qが12、Kが13だ

「わかった」

俺はフランとの間にトランプの束を置き、交互に2枚引いた。

持ち手はダイヤの9とハートの6。  
出だしは18だな。

この時点だと3を引けば勝てるが……バスだな。

「まだ引いて大丈夫そうだつたら引いて良いぞ? ただしオーバーしたら負けだからな?」

「えーとKが13だから……もつ一枚引くね?」

フランはさうやうへ持つているらしい。3枚田のカードを引いた。

「21だよね？」

「もうだ

「ピッタリだよーー！」

なん……だと……？

互いに手札を公開すると、フランはスペードのK、ダイヤのA、クローバーの7だった……

「凄いな」

「えへへ～

「どうするつてもつ一回やるか他のにするか？」

「うへん……じゃあさつき言つてたポーカーつてもつ

「ポーカーか、役を覚えないと始まらないしなあ……」

俺は一通りフランに役とルールを教えた。

意外にも早く覚え、すぐにやることになった。

「じゅ配るぜ」

交互に5枚配り、持ち手を見る。

スペ5、スペ2、クロ4、クロ5、クロ8。

「Jのままだとただのペアだな。

「せつ きも言つたとおり、要らないカードは一度だけ一旦山札に戻して引き直す事ができるがどうする?」

「うへん… 3枚かな」

「わかった」

俺はスペード2枚を山札に戻し、フランに3枚、手元に2枚置き、山札を戻した。

結果、スペード、jokerが手札に加えられ、俺の役はjokerを8に換える事で、トリプルになつた。

「セレジヤお兄ちゃんか？」

「えつとらぬせいか?」

フランの手元にはハートA、クロA、クロ9、ハート9、Joker  
「があった。

「ははは!...また負けちまつた。フランは強いなあ」

「うーじめですねーー」

「いやこや、負けは負けだ、俺の運がなかつただけだしな」

「他には無いの?みんなでできるゲームとか」

「沢山あるや?広間に行ってみるか?」

「うん!...みんなで遊びたいし」

俺とフランは広間へ向かい、扉をノックした。

「入つていいか?」

「どうぞ」

広間へ入ると、夕食を食べてるパチュリーと小悪魔と美鈴が居た。

「うわ!!!パチュリー様気を付けて下さい!!!あの人ガ変態ですよ  
!!!!」

早速フラグ建てやがつてえ!!!!

「変態？」

「『』、誤解だ！…あれは不慮の事故で……」

「私の使い魔、高いわよ？」

「ちょ、パチュリー様！！」

今日は調子が良いのだろうか？パチュリーはクスクス笑っていた。

「夕飯食べ終わってからでいいからトランプって言つカードゲームしないか？」

「トランプを持つてゐるの？」

おやっ、パチHさんはトランプを知つてゐるよつだ。

「前に本で読んだわ。外の世界にある遊戯道具と書いてあつたわ」

「正解。美鈴もどうだつて……顔色悪いぜ？」

「…………めんなさい」「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい……」

「うわーーひぐらしさしてるーー。

「居眠りしてると、いのを咲夜に見つかってしーわ」

「成る程、可愛そうに」

美鈴には不戦勝でいいか。

俺とフランは会話しながらパチュリーと小悪魔が食べ終わるのを待つた。

パチュリーの管理している図書館にはかの有名なスキマババアが外から本を持ってきて置き場にしているらしい。

「だからブラックジャックとかあつたんだ…外から万引きしてんのかあのバ…」

誰力ナ？僕ノ首ヲ絞メテイルノハ？

後ろには正真正銘八雲紫が隙間から上半身だけのぞかせていた。

「今誰のことをババアって言おうとしたのかじり？」

ヤバい、首からギリギリって音がしてる…

死ぬwww……

「ま、さ、か、紫様の事なわけ、ないじゃない、です、か」

「それは良かったわ」

いつか絶対に報復してやる！－覚えておけ隙間ババアめ！－

## おれかのテュエル！？【八雲紫戦】（前書き）

どうも、作者です。

この章はリア友からのリクエストで作ることになった章です。

度々こんなことが続かなければ良いんですが……

## まわかのデュエル！？【八雲紫戦】

「知らないの？私少しなら心も読めるのよ？」

解放された首が再度絞められそうになつた瞬間、フランが紫の目前にレーヴァテインを構えた。

「お兄ちゃんをいじめると…フラン怒るよ？」

「待て待て待てフラン！俺とゆかりんは仲良しだからじやれてただけなんだ！…虜められてたわけじゃない！」

「はあ？何言つて」

（空氣読め！…フランが発狂したらどう責任を取る…？）

「ふん…！…あんた外来人よね？」

「そうだ」

外来人とは幻想郷の外からやつてきた者の事を言います。

「出身は？」

「日本だ」

「なら遊戯王は知ってるわね？」

「一応プレイヤーだが…」

「そりゃ、ならデュエルよ…！」

「あー？ こきなり何だ！？」

「私に勝てたらさつきの発言、聞かなかつた事にしてあげるわ」

「む……ゆかりんとは仲良くなしたいし…………いいだらう、ちょっと待つ  
てひ」

ノリでデュエルすることになつた俺は携帯の武具生成機能で生前使  
用していたテックキと全く同じものを生成した。

そして戦いが始まった。

「「デュエルーー！」」

先行は紫。

「ドロー。異次元の女戦士召喚、カードを2枚伏せてターン終了」

恐らく次元帝だらうな。

紫だしwww

「俺のターン、ドロー！！」

手札

サイクロン

コアキメイルドラゴ

仮面竜

王宮のお触れ

未来融合フューチャーフュージョン

氷眼の白夜龍

「俺は未来融合を発動、対象はF・G・D。デッキからブリザード

「ドラゴンを2枚、レッドアイズダークネスマタルドラゴン、紅眼の飛竜、ミンゲイドラゴンを墓地へ送る」

「アーヴィングテックね」

「俺はカードを2枚伏せ、コアキメイルドラゴン喚ーー！異次元の女戦士へ攻撃宣言ーー！」

「異次元の女戦士の効果、コアキメイルドラゴンと異次元の女戦士を除外するわ」

紫LP7600

俺LP8000

「ターン終了ーー！」

「私のターン、ドロー。手札から異次元の偵察機を召喚。ダイレクトアタック」

紫 L P 7 6 0 0

俺 L P 7 2 0 0

「ターン終了」

「俺のターン、ドロー！－、スタンバイで未来融合のカウント！」

手札

仮面竜

氷眼の白夜龍

ホルスの黒炎竜 L V 4

場

表、未来融合  
裏、王宮のお触れ  
裏、サイクロン

「俺は何もせずにエンドフェイズ、墓地の紅眼の飛竜を除外しレッドアイズダークネスマタルドラゴンを特殊召喚！！ターン終了」「

「私のターン、ドロー。異次元の偵察機を生け贋に光帝クライス召喚！！効果によりレッドアイズダークネスマタルドラゴンと右側の伏せカードを破壊！！」

サイクロンとレッドアイズダークネスマタルドラゴンが破壊された代わりに俺はデッキからカードを2枚ドローした。

因みにクライスは召喚したターンには攻撃できない効果がついている。

「ターン終了よ

「俺のターン、ドロー！！」

手札

仮面竜

氷眼の白夜竜

ホルスの黒炎竜LV4

融合呪印生物 閻

ドレッドドラゴン

禁じられた聖杯

「スタンバイ時にEXデッキよりF・G・Dを融合召喚！！メインフェイズ、俺は手札から仮面竜を召喚しカードを一枚セット、FGDでクライスに攻撃！！」

「残念、ダメージ計算時、手札からオネストの効果発動、攻撃力+5000で7400！！FGDは光属性の戦闘では破壊される！！」

紫LP7600

俺LP4800

「ぐつ……ターン終了」

「エンドフェイズ時、リバースカード発動、異次元への隙間発動！属性は闇！！」

「悪いな、チエーン、王宮のお触れ。処理順から無効だ」

「ちつ 私のターン、ドロー。手札からゾンビキャラリアを召喚、  
LV6、光帝クライスにLV2、ゾンビキャラリアをチューニング！  
！シンクロ召喚、スターダストドラゴン！！」

「次元帝じゃないのか？しかし偵察機は一体……」

「悪いわね、次元帝では無いわ。スターダストドラゴンで仮面竜に  
攻撃！！」

紫 LP7600

俺 LP3700

「仮面竜の効果によりデッキから神龍ラグナロクを特殊召喚！！」

「ターン終」

「俺のターン、ドロー」

手札

氷眼の白夜竜

ホルスの黒炎龍LV4

融合呪印生物 閻

ドレッジドラゴン

死者蘇生

「勝つたな」

「へ？」

「手札より死者蘇生を発動！！墓地よりレッジドアイズダークネスマタルドラゴンを特殊召喚！！手札から融合呪印生物闇を召喚し効果発動！！融合呪印生物闇と神龍ラグナロクを墓地に送り竜魔神キングドラグーンを融合召喚！！レッジドアイズダークネスマタルドラゴンの効果で墓地からブリザードドラゴンを、キングドラグーンの効果で手札から氷眼の白夜竜をそれぞれ特殊召喚！！」

場

レッドアイズダークネスマタルドラゴン

竜魔神キングドラグーン

ブリザードドラゴン

氷眼の白夜竜

「バトル！！氷眼の白夜竜でスターダストドラゴンを攻撃！…」

紫L.P.7100

「禁じられた聖杯発動、対象はブリザードドラゴン。ブリザードドラゴン、キングドラグーン、レッドアイズダークネスマタルドラゴンでダイレクト、トドメだ」

合計7400ダメージ。

「あ、負けた……」

「約束通りさつきのは忘れてくれ」

「まあいいわ、許すとしまじょい」

「お兄ちゃん強いね……ほんとほやつちフリコンに手加減してたんじ  
やないのー…?」

フリコンが皿をキラキラさせながら聞いてくる。

言えない……アレがただの運ゲーだなんて……

「こやこや、フリコンの勝ちだよあれば。で、本当は何の用事なんだ  
紫」

「やうね、とりあえずアナタ誰?..」

そっからかよ！！知らない人とテュエルしたんですかあんたは！！

「やうよ悪い？」

「俺は鬼澤颶。 よりしくハ雲紫」

「よりしくね

紫はそれだけ言つと隙間に中に消えた。

「フラン、済まんが小一時間待つてくれないか？」

「？」

「後々俺と連絡出来ることあるためだ

「どうか行っちゃうの?」

「ああ。俺もどこへ飛ばされるかわからないが……その世界の悪い奴を倒したら戻ってこれるんだ」

「なら我慢する」

「悪いな、パチュリーと小悪魔もじっくり話してくれ

「しょうがないわね

「分かりました」

携帯を取り出し、瞬間移動機能を起動し、姫海棠はたての家の前と入力して決定を押した。

転移先の通りには誰もおらず、寝静まっていた。

「天狗は寝るのが早いのか？」

時刻は夜10時、人間ならまだ起きていてもおかしくない時間だ。

目の前には【姫海棠】と札のある立派な一軒家があり、灯りはついていた。

取りあえず扉をノックしてみた。

意外な事に直ぐに出て来てくれた。

「えっと……誰？」

「姫海棠はたて……頼みがある」

「人間……どうやって里に……それよりも頼みつて?」

俺は無言で携帯を取り出した。

「携帯を持つてることはある……外来人?」

「そうだ。アドレス帳に登録してくれ。俺は鬼澤颯、現在紅魔館の執事をやつてるんだが……」

俺は事の次第を全て話した。

現れたり消えたりする存在だと言つこと。

消えた時の連絡手段が携帯しか無いこと。

等々。

「別にいいわよ」

「本当か！？助かる」

「しつ……あんまり大きな声出さないで。本来桿の目に見つかってない」と自体奇跡に近いのに騒いだら見つかるわ」

「そうだな」

赤外線通信でお互いのプロトを交換した。

## 厄神様と芥川龍之介の河童

「でもあんた別世界に行くんでしょ？普通に考えて電波通じなくな  
い？」

「その点は大丈夫だ、俺の携帯は世界を無視できる。要は圏外にな  
らない」

「ふうん。そうだ、仲介人になってあげる代わりと言つては難だけ  
ど……明日歩いて妖怪の山を登つてここまで来てくれない？」

「別にいいが何時頃だ？」

「じゃあ1~2時ジャストに登り始めて」

はたての意図が解らないが断る訳にはいかないだろう。

疑問に思いながらも承諾した。

「邪魔したな、俺は帰る」

「あそ。じゃあ明日に会いましょう」

俺は瞬間移動で紅魔館の広間へ転移した。

「わっ！…びっくりした」

「悪い悪い。それと明日用事が出来た、今日は早く寝たいからワンゲームな

「わかった」

「じゃあ何する？無難にババ抜きとか？」

「4人なら確率的にいい具合ね」

「どうか、パチュリーはトランプのゲームを知っているのか。」

「じゃババ抜きだな。ルールはjokerを最後に持っていた人が負けで手札が無くなつた順に勝ちだ」

「なんか簡単だね」

「いやいや、意外と奥が深いぜ？」

俺はjoker一枚を除いたトランプの束を4等分し、全員に配つた。

「じゃあ始める。先ずは同じ数字のカードが2枚あつたら手札から2枚とも出してくれ

「わかりました」

「ええと、これとこれかな？」

場には各自がペアのカードを出し、全て出し終わつたところでゲームが開始された。

「じゃあ俺から時計回りにカードを取つて行くから手札にもつ正在するカードと同じ数字のカードを引けたら捨ててくれ」

順々にカードを引き合ひ徐々に枚数が減り始めた。

そして一番最初にあがつたのはパチュリーだった。

「今回は運が良かつたわね。じゃ最後の一枚をフランに渡すわ

「あつーー。」

ん？ joker 引いたか。

右から2枚目だな。

「じゃあフラン、パチュリーが外れたから俺はフランからカードを引かなきゃいかん」

「う、うん」

俺は右から2枚目のカードを引いた。

引いたカードがjokerだと思っていた時期が僕にもありました

www

いや物理的におかしいだろ！！物理の授業なんてまともに受けてなかつたけど俺でもわかる、これは怪奇現象だ！！

フランはカードを一切入れ替えていない。つまりパチュリーから引いた最後の一枚が joker じゃなかつた以外には手札の順からいって確実に joker になるはずだ。

「ハツ、 もしや……」

イカサマが出来ない能力……なのか？

高性能杉クソワロタ www

それ以外に可能性は無いな。

「どうかした？」

「いや、何でもない

気付けば俺が引いたのはペアとなつたカード。

そして残り手札が3枚で2枚減るから……上がりだ。

ついでに俺の手札にあるのがクローバーのA、小悪魔の手札が1、  
フランも1。とすると……

「あがり……ですね」

ヤバいこれでフラン覚醒のお知らせとか特にヤバい……

「むう… 今日は負けちゃったけど次やるとそれは絶対勝つからね…」

発狂はしなかつたようだ。怒ってはいるけど。

「おひ。じゃあ片付けて部屋に戻るわ」

テーブルの上有るトランプをまとめ、俺は広間から仮由室へと戻つた。

「やういや寝間着が無いな……」

なんとなく部屋に備え付けてあったタンスを開いてみると何故か紺色のジャージが上下2セット入っていた。

「咲夜さん有難う御座います」

堅苦しい執事服からジャージに着替え、ベッドに入り眠りに就いた。

翌朝

携帯の田覚まし音が鳴り響き、俺は田を覚ました。

「田覚まし機能付いてたんだ……」

鳴り響く田覚まし音を止め、ベッドから這い出た。

「あと4時間暇だな」

とつあえずタンスから俺の着ていたTシャツとジーンズを取り出し、着替えてから部屋を出た。

「お、やつちゃん発見」

凄いデジャヴだ。咲夜さんが昨日の朝拭いていた窓を拭いていた。

「おはよう。てか紅魔館の窓全て毎日拭こてるの?」

「旦課なので」

「おはよう。てか紅魔館の窓全て毎日拭こてるの?」

なんか……人として敗北した気がする。

迷うほど広い紅魔館全ての窓とかwww

1日かかっても無理な希ガスwww

「因みに何枚位あんの?」

「数えたことがないので解りませんね」

とどのつまり数え切れないのであるわけですね、わかります。

「厨房に行けば朝食が有りますので良かつたらどうぞ」

「んじゃ ありがとうございます」

咲夜さんに別れを告げ、厨房へ向かつた。

「今日の朝飯は……スープカレーですか。朝から豪華だな」

厨房にあるテーブルに米とスープカレーを皿に盛り、あつという間に食べ終わり、食器を洗つた。

「料理の腕もかなりのものだな。スパイスが絶妙過ぎる」

洗い物がゴに食器を立てかけ、厨房を出よつとしたとき、出入り口付近の床に血のようなものが垂れていた。

「凝固してなにつて」とは……誰か怪我してるのか？」

厨房から廊下に出るとぼたぼたと血滴が続いていて、まるで後を追つてこことども垂つてこるようだ氣味が悪かった。

「厨房からいきなり血が垂れてるし来るときはこんなのがなかつた……とすると入つてから気づかない内に誰かが抜け出でていつた事になる……薄気味悪つ……」

これ以上係わるのはよみうりホラーは苦手だ

血滴をスルーし、俺は広間へ向かつた。

「誰もいないのか」

「誰か探してゐるんですか？」

「「つむりー？」

いきなり現れんなしwww

咲夜さんが真後ろから声を掛けってきたよつだ。

「ちよいとレミコアを探していくね、所で厨房から血が垂れてつてたんだけどなんなのあれ？」

「血? ちよいと見てきましたね。

お嬢様なら多分お部屋に呪るかと

「レミコアの部屋でいる。」

「お嬢様のお部屋は最上階の一室ですか？」

それだけ言つと咲夜さんは消えた。

俺は最上階である4階へと登り、一部屋しかない部屋の扉にノックをした。

「俺だ」

「入つていいわよ」

レミコアの許可を得、扉を開いた。

「何か用?」

「実は今日妖怪の山を登らないといけないんだ」

「あつそ。精々死なずに帰つてきなさい」

「理由を聞かないのか？」

「どうせ物好きな天狗が面白半分で歩きで登つてことか言つたんでしょ」

「そりゃ、邪魔したな」

「待ちなさい」

レミコアは俺を呼び止めると化粧台の引き出しだから赤い石を持ってきた。

「これは？」

「ん~……御守りとでも思つてくれればいいわ」

「そりゃ、ありがとうな」

俺はレミリアから謎の赤石を受け取り、自室へ向かつた。

「で、何でフランが俺の部屋に居るんだ？」

「ち、違うよ？別にお兄ちゃんの匂いを嗅ぎにとかじゃないよー。」

うん、信じないでおこづ。

「じゃあ何で居るんだ?」

「ひ、ヒマだつたから…」

「朝飯は？」

「まだだよ」

「じゃあ広間に行つてろ。今日はスープカレーだ、皿かつたぞ?」

「うへん……でもあんまりお腹減つてないから後で食べる」

「うやうやしく簡単に逃げられないようだ。

「とにかく自分の部屋に戻りな。俺は妖怪の山に行かなきゃならないんだ」

「また行くの?」

「まあな

時刻は気付くと10時をまわっていた。

2時間余裕があるからフランにかまつていても問題は無いがそれよりも人里に行きたい。

「帰つてきたまた遊んでね？」

「おk。じゃあな」

携帯の瞬間移動を使い、人里のはずれに佇むとある館へ転移した。

外は照りつける太陽が忌々しいぐらいの晴天だった。

「紅魔館に比べればアレだが充分、デカい館だな」

眼前に映るのは稗田阿求が住む館。見た目からして一応和式らしい。

瓦屋根とか東京じゃ殆どみないし。

「『めんくださーいーー!』

モチのロンでインターフォンなど無い。

まもなくして出てきたのは和服に身を包んだ使用者らしき女性だった。

「どちら様ですか?」

「俺は鬼澤颯、外来人だ。稗田阿求殿に会いたいんだが……」

「少々お待ちを」

使用者らしき女性は館に戻り、しばらくしてから「阿求様の許可が

取れましたので「案内します」とのいひ。

スライド式の扉の先は玄関になつていて、少し懐かしい感じがした。

まあ紅魔館内でアメリカ人みたく土足で歩き回るのが当たり前にはりかけてたからかも知れないが。

玄関で靴を脱ぎ、使用人の案内の下、阿求が居るという和室に到達した。

「阿求様、お連れいたしました」

「さがつて下わー。鬼譯さんばどひがいひがい

目の前の襖を開くと新聞と俺の顔を見比べる阿求がいた。

「はじめまして、稗田阿求と申します」

「はじめまして。俺は鬼澤颯、外来人だ」

「そうですかそうですか、この新聞に載つてるのはどうやら貴方の  
ようですね」

新聞？ インタビューとかに答えた覚えはある

「ハッ！？まさか文々。新聞なのか！？」

「ええ、文々。新聞です」

「ちょっと見せてくれ！！」

阿求から新聞を貸してもらい、記事を読む。

固・ま・つ・たwww

記事には「写真付きで」いつ記されていた。

/号外！！件の赤い霧に終止符が打たれた/

最近騒がれていた赤い霧を止めたのはなんと外来人！？首謀者は紅魔館の主、レミリア・スカーレットで話によると日光が鬱陶しいから赤い霧を発生させた模様。

なお、その外来人は鬼澤颯と言つらしく、博麗氏も結界の事に関して良い評価をしている。

現在、鬼澤氏は人里等で見かけられたりするがどうやら定住地は紅魔館のようだ。

「今夜は鴉天狗の丸焼きかな」

「ははは、そう言わずに。それはそと今日は何の用でいらしたんですか？」

「まあ幻想郷縁起が見たいだけだつたんだが……」

「それなら構いませんよ。案内させます」

「いや、気が変わつた。ちょいと用事があるつて言つか……また今度頼みたいんだが良いか」

「こつでもどうぞ」

「うう　こんな薄汚い俺にそんな笑顔を向けないでくれ……」

「感謝する」

「ついでに、和室を出た。

部屋を出ると直ぐに使用人が来たが俺は案内を断り、携帯の瞬間移

動で博麗神社へと転移した。

転移先は境内のど真ん中で、ボロい神社とすっからかんの賽銭箱が窺えた。

「予想通りだな wwwとりま賽銭で巫女を釣るか」

人里で入手した札入り封筒を取り出し、一万円札をピラピラと音が鳴るように振った。

それとほぼ同時のことである。境内に不穏な空気が漂い始め、鋭い視線を感じる。

「うーん、巫女さんが出てきたら倍にしようと思つたんだがなあ～」

わざとらしく大きな声で棒読み口調で釣りをしてみる。

「はい、博麗神社へよひこしつ……」

声が裏返ってるしwww

本堂から慌てて靈夢が出現した。

人間、金が絡むと扱いやすい物だ。

「靈夢を釣るのは金で安定ですわ」www

「う、ついでいわね……」

靈夢に諭吉さんを2人献上し、神社内の茶の間に通された。

「ちよつとまつして」

茶の間に着くなり靈夢は奥の廊下へと消え、5分程度で戻ってきた。

「はい、お茶と砂糖菓子」

「あやーす」

卓袱台ちゃふだいに靈夢が持つてきた砂糖菓子と緑茶の入った湯飲みをお盆から移した。

「で、今日は何の用で来たの？」

「紅魔館での約束、一応果たしに来たつて所かな」

「でも私、魔理沙に忠告はしたけど止められなかつたわよ？」

「気にすんな。だつたら靈夢の顔を見にきたでいいや」

「なー？突然何言い出すのよー？」

おやあー？意外にもこいつ方面のセリフには弱いのかなあ？

「突然じゃないさ。紅魔館で鉢合せた時も実際靈夢と話がしたかつた……ただそれだけだつたからなあ」

「えつ？　ええ！？」

靈夢の顔が真っ赤つかｗｗｗ

真っ赤靈夢だｗｗｗ

「なんてな、冗談だ。本当の所は

」

「このつ

」

当然の如く靈夢はキレて、袖口から一枚のカードを取り出した。

「スペルカード発動、【靈符】夢想封印！！」

「その元が欲しいんだよ」

室内なのにも関わらず大玉の弾幕を張るが……

カシャッ！－

あらかじめ構えていた携帯のカメラで全ての弾幕を一気に切り撮つた。

「あんた…まさかそれを言つためだけにそそのかしたんじゃ無いでしょ?」

「こやあ、シンデ靈夢なら確実にやらかしてくれると思つていたよ

「私なら良じけど魔理沙とかだったら消し炭にされるわよ?」

「なに、ヒリリアやフランに比べれば楽勝さ。

この砂糖菓子とハバネロペッパー位の差があるから大丈夫だよ

「あのねえ……本気を出せばあんたなんか瞬殺だと思つわよ?」

「俺の結界にヒビしか入れられないと指一本触れないなwww

挑発に乗るかと思ったが逆に悲しそうな顔をしていつて返してき  
た。

「正直ヒビが入った事自体が奇跡ね……あんな弱点を補い合った結  
界は一度と御免ね」

「そりゃ

靈夢は無言で立ち上がり、タンスからまつさらのカードを3枚取り  
出し、渡された。

「作り方は両手で挟んで効果、弾幕の出方、威力の順に念じるだけ。  
基本的にどんな効果でも作れるけど強い物ほど精神的に<sup>ひくい</sup>疲弊するわ

「おー、感謝するぜ」

白紙のスペカを受け取り、特にそれ以上の用事も無かつたので卓袱台に乗つてゐる湯飲みの緑茶を飲み干し、靈夢に帰る旨を伝えた。

「おつ帰るの？まあ長留しごとに言わないけど……また来なやー」

「ああ、わづかせてもうひづ。わづこや宴会つてこつやるんだ？」

「氣紛れね。あんた定住地はどこよ？紅魔館？」

「あと一週間ちよこは紅魔館だ」

「ふーん、その間に宴会があつたら呼びに行つてあげるわ」

「やけに親切だな」

「お賽銭沢山くれたからね」

やはり靈夢釣りは金に限るwww

携帯を開き、時刻を見ると11：49になっていた。

なんか時間経過が速い気がするのは『気のせい』か？

瞬間移動機能で妖怪の山の麓に転移した。

「昨日は暗くてわからなかつたがこれは…………」

麓から見上げた景色は絵画の『トッサン』に使われていてもおかしくないくらいに綺麗だった。

暑さを忘れ眺めていると何故か視線を感じる。

辺りを見回しても誰も居ない。て」とまじや……

「フッ…居るのは解つていい。俺にその程度の迷彩は通用しないぜ？」

「ひゅーいつー?な、なんで!改良して極みまで済したのに…」

周囲の景色に溶け込んでいた水色が姿を現した。

「おぬし……何者!?

「チート機械をもつた一般ピープルですwww」

迷彩で隠れていたのは河城二トリ。

お値段異常で有名なあの二トリだwww

「ちーと機械？」

「いやまあ気にするな

「ପ୍ରକାଶନକୁ」

俺は目をキラキラさせていい一トリに携帯を見せた。

「ちーと機械つて携帯の事だつたんだ」

「やっぱ知っていたか」

「そういえば自己紹介がまだだつたね、私は河城一トリ。この先の滝壺の裏側に住んでるんだ」

「俺は鬼澤颯だ、よろしくアーティ」

てかさつきの感が当たつてなかつたら俺ただのイタイ人だよね！？

否定はしないが。

「所でここは妖怪の山だよ？人間が登る所じゃない」

「姫海棠はたてに用があるって言つたら？」

「何があらうと私は止めないけどね、気を付けてね？」

やはり一トリは良い奴のようだ。よかつたイメージ通りの性格で。

「それとこの辺は管轄外だから見つからないけど犬走査つていう警備隊の1人の能力が」

「知ってるぞ、千里眼だろ？」

「ならもつぱいことは無いよ。好きこそすればいいさ」

「所で……桜は将棋強いか?」

「え? ちょっと強い程度だけだ……」

「聞いてみただけだ」

う~む……確かに千里眼に見つかってフラフラ集まつたら面倒だ。

今之内に手を打つておくか。

携帯の武具生成機能を起動した。

分類 ネックレス

強度 壊れない

能力

・装備中に機械探知、能力探知に引っかからなくなる。

・装備中、刃物による攻撃を全て回避できるようになる。

・装備中、あとあといる生物と意思の疎通をとることができる。

生成して出来た物は百均で売つていそうなプラスチックの物のようだ。

なんか凄く残念な気分だ…

「手品？」

「いや、ここつの機能だ」

「へえ。その首飾りは何？」

「付けてると探知系の能力と機械に引っかかるなくなる」

俺はショボいネックレスを首に提げ、山頂を田舎す。

何故か後ろから一トリが着いてきてるが気にしない。

「あれ？ 難がいる」

「マジか……ん？」

ふと思つたが転生するときの神と厄神とかその他神つてどう立  
ち位置なんだ？

今度話す機会があれば聞いてみるか……

「うへん……すげここの厄がこの近くにある気がするのだけれど……」

彼女は鍵山　ひな　離、厄を司る神様だ。

「見つけた！…そこのあるあなた！…」

ゑ？俺ですか？凄い厄ってもじしや俺ですか？

離は俺に近付き、空港でやつそつな身体検査が如く俺の体をベタベタ触り始めた。

「これのみんな…」

離は俺のポケットから赤い石を奪った。

「離……逆ナンは良くないと想つよ？」

A＼的展開になつた、ひびつかぬの?」

「あら、私としたことがいきなり殿方に……／＼／＼

そして赤くなる雛。

ニトリ、それは禁句だろwww

「それ、ユリシアに貰つた御守りじゃないか」

「この石から物凄く濃厚な厄を感じます」

「だから雛なんでそんなに積極的なの? 濃厚な厄を感じるとか捉え方によつては……」

「ニトリーストップストップ! — それ以上はマヂヤヴァイから止め  
たげて」

「おま、首はまづいだろ？」

「おひと、誰か来たよつだ？」

「とにかくの口は持っていない方が得よ？周りから回を集め続けている」

「逆に凄いな。てかレミアは何でこんな物を……」

「何が変な感じがする……全身がうずきあむと感つか……」

本能的とでも言つか、何故か俺はその場から半歩下がった。

その瞬間、俺が居た位置に銀の線が走る。

「なつ！？避けられた！？」

196

おかしいな、千里眼には見つからない筈だが……

「あれ？ 何でこんな所に棲が居るの？」——「は管轄外だし」

「いえ、今は休憩時間なんで。滝壺の裏に一トリが居なかつたからここに飛んできたら見えない人間が居て……」

「だからって首は狙うなよ！」

上空から急速に距離を詰め、居合い切りをしたらしい。  
まったく、危ない事しやがつて。

## 2人の面倒な新聞記者

「で、見えない事は置いといて妖怪の山を登ると書つならそれなりの措置を取りますよ？」

「首ねらつた奴の台詞がそれかよ~~~~  
安心しろ、別に危害は加えないし自分の身も守れる」

「なら何故登るとするんですか！？」

「そこには……山があるからさ~~~~

正確には姫海棠はたてに用事があるからなんだが

「あの念写天狗ですか？」

「まあそんなどこりだ」

「なら警戒として私が同行しますが良いですか？」

あれ?なんか普通に入れそうだな.....

「どうして皆いつも積極的なのかね?雖は逆ナンするわ桜はこきなりデートに誘うわ.....私も何かすべき?」

「ち、違いますよー!私は里のために」

「いや.....お前はお前で積極的過ぎる気がするんだが.....」

放つとこたらその内暴走するだよイツwww

「とつまーたり、お前は自分の家に帰れwww

「ホールームの邪魔って言つたのねーー私は遊びだったのーー?」

なにこの面倒みたいな台詞~~~~~

桜がドン引きしてゐる~~~~~

「桜、誤解だ。一トリがふざけてるだけだ。それどバードだと  
思つていない」

「いやちを見ないで下をこいの女たらしー。」

おとおと。一トロ...これがキャラのお前は攻めに回つやめた。

こつからは俺のターンだ。

「一トロ、おまつと耳貸せ」

疑問符を浮かべながら近付いてきた二トリに耳打ちである小説の一節を思い出せる範囲で語った。

するとみるみる二トリの顔が赤くなり、ひゅいっと一鳴きした後、一目散に逃げていった。

「何を話したなんですか？」

「いやあ、中学生の頃に教室でとある小説を朗読したんだ。そしたら何人かのクラスメートが教室から顔赤くして出て行つたんだ」

「どんな内容なんですか？」

「離ならず多分平氣だろ」。

二トリと同じく耳打ちで教えてみた。

「あらあらまあまあ。それは純真な心を持つた少女には刺激が強す

ぎるかしらね

予想通りだな。因みに読者の方々の中にはもしかしたら純真な方も居るかも知れない。

まさかね、官能小説をね。この場で朗読するとかね、マジ有り得な

おつと、口が石鹼を踏んでしまったか WWW

「そういう自己紹介がまだだつたな、俺は鬼澤颯、外来人な」

「私は鍵山雛、厄を司る神です」

「いぬばしり もみじ犬走柵です。天狗ポリスの監視役兼撃退役です」

いや知りますよ。

てかさつさとはたてに会わないと。

「桜は着いてくるとして離はまざつするんだ?」

「そうですねえ……よろしければ同行したいんですが……」

「構わないが何も楽しいこと無いかもよ?」

その時上空から影が差した。

見上げるとパンチ

「ぐぼあつーー!」

靴底で思いつ切り顔面を踏まれ、勢いで受け身を取る暇もなく地面に衝突した。

「こうしてえーーー。」

「今、見ましたよね？」

聞いたことの無い声がしたので顔を押さえていた手をじかし、姿を確認する。

文か。

「馬鹿か！－俺は紳士だ、見るわけ無いだろ？！－仮に見えてしまつたとしたらそれは事故だし見えぬ振りをするのが紳士なのだ！－」

「とビのつまり見たんですね？」

「はい見えてしましたすいません」

やつぱ人間、即土下座は基本だな。

「まあ別にそこまで気にしてないんですけどね……」

「俺の人生初の土下座を返せ」

「で、何で桜がここに居るんですか?」

「姫海棠に用事があるらしいのでそこの人間を里まで連れて行く途中です。暇なあなたと違つて私は警備の仕事で忙しいんですね」

「休憩時間じゃなかつたか?」

「あなたはずつと黙つていて下れ……」

「確か……鬼澤颯さんですよね?」

「そうだが?」

流れ的にインタビューされるんだろうな。

かつたるいな……

そんな事を考えているとまた1人、誰かが飛んできたようだが先の事から上を向かずに着地を待つと、姫海棠はたてが降りてきた。

「ちょっと文、私の取材対象に手を出す気？」

「あれあれえ？ 誰がそんな事決めたんですかあ？」

なにこの空気 WWW

波乱なヨカーン WWW

「はあ、文のせいで計画が狂つたわ……査に見付かって戦闘している所を記事にしようと思つたけど……無理なようだから質問に答えてくれないかしら?」

それで徒歩で来いとか言つたのか。

仮に査が襲つてきても(性的な意味ではない)華麗にスルーして逃げるつもりだつたが…

「まだ私の話が終わつてないのに勝手に話を進めないでくれる?」

「私はこの人に貸しがあるの、だから優先されるのは私よ文」

「言つてることは間違つていないうちに迷惑だから他の場所で勝手にやつてくれ……」

## 5人の司りし者

「まあ……なんだ、争いは止めてくれないか？それに俺は姫海棠に頭が上がりない、済まないが取材は姫海棠の後にしてくれ」

喧嘩が止まるなら問題無いだろ？

どうせ似たような事聞かれるわけだし。

「はたての後ならokなんですか？」

「それで争わないんだつたり。俺はこよなく鳥を愛する男だから傷つけ合つて欲しくない」

「そ、そうですか…

私は一旦引きます、はたての取材が終わったら守矢神社までご足労願えますか？」

多分歩かないが別段用事も無いし、守矢神社と言えば早苗さんとか居るだろ?」

今から期待で胸が一杯だ。

「りょーかい。んじゃ姫海棠、手短に頼むぜ」

文はその場から一瞬で消え、はたてによる取材が始まった。

と言つても聞かれたのはどうやって幻想郷に来たか、身長、体重、その他素人の俺でも記事にならない事位判るどうでもいいような事ばかり聞かれ、15分程度で質問は終わったようだ。

「ふむふむ。参考になつたわ。それじゃ最後の質問ね、『好きな女性は?』

記事にされたのかな……これ……

「ミステイアだ……！」

「なんだ。ミステイアも隅に抜けないわねwww」

やはりみすこを知っていたか。  
てかはたての事を知っているような事ミステイアが言つてたつ。

「じゃ俺は守矢神社に瞬間移動で行くが……」

この機能つて俺以外の人と一緒に移動できるのか？

「う~む、とりま試してみるか

俺は雛の手を取り、瞬間移動で行き先を『守矢神社』に設定し、決行した。

「触つてればとつあえずは移動出来るんだな」

TO Loveる的な展開を想像していた時期が俺にもありましたww

よく考えたら服だけ綺麗に脱げるとかおかしいよねwww

「あれ？ 雛も来てたの？」

転移先は例の如く境内。

そして前方から何故か空の籠を持つた2人の少女が近付いてきた。

「何で秋姉妹が？まだ一応8月だから夏の筈だぞ？」

「誰？」

「彼は鬼澤颯さん、外来人だそうよ」

「初めまして、あきしづは秋静葉です」

「あきみのりこ秋穂子と申します」

「雑の言つた通り、俺は鬼澤颯だ。以後よろしく」

「あなた達はどうして守矢神社へ？」

「今年も豊作だったきゅうりとかトマトとかの差し入れだよ

確か穰子が近くに居ると農作物が豊作になるんだっけ。

「雛は何をしに？」

「鬼澤さんの用事で来たので私は付き添いです」

「なあ雛、普通に颯でいいぞ？さん付けとかもかつたるいし」

「そうですか？私としては癖みたいな物なので颯さんと呼ばせていただきます」

癖を治せとか言われても困るだろうから俺は何も言わなかつた。

てかちよつと図々しかつただろうか？

今日知り合つたばかりの奴相手に呼び捨てとか。

「へえ。そういうえば射命丸が誰かを待つていてるみたい」と言つてたけどもしかして君の事かな？」

「多分当たりだ」

さつさと用事済ませて幻想郷縁起見に行こう。

秋姉妹は河童達にもきゅうりを差し入れに行くらしく、2人揃つてどこかへ歩いて行つた。

あの籠は野菜を入れていたのか。

離と俺は良く掃除の行き届いた母屋に当たる建物へ行つた。

「（）めんぐださーい！！」

返事が無い、ただの（）（）

「本堂に居るのかな」

本堂へ向うと何故か障子の少し開いた場所があつたので中を覗くと、黙祷する緑髪の巫女、目を瞑つて何かを呴いている腰に巻いたしめ縄が特徴的な女性、大きな目玉が付いている帽子を被つた小学生かと見紛う少女の姿があつた。

「お取り込み中悪いんだが射命丸が来てないか?」

我が名は通称、エアクラッシュヤー WWW

空氣も読まずに声を掛けてみた。

## 射命丸文からの取材

「文屋が待つているって言う外来人はあんたかい？」

返事をしてくれたのは洩矢諭訪子もりや すわこだった。

しめ縄を腰に巻いた女性、八坂神奈子やさか かなこと緑髪の巫女さん、東風谷早苗ひがみや さなえは完全に無視しやがった。

「一応そう言う事になってる」

「私は洩矢諭訪子、この神社に祭られている神さ。君は？」

「俺は鬼澤颯、ただの外来人だ。よろしく洩矢様」

俺が自己紹介的な物をすると諭訪子は目を丸くした後、何故か大笑いし始めた。

可笑しなこと言つたか？

「いやあ……」めんね。颯君が眞面目な顔で様付けなんかするから  
…つい可笑しくて…」

「いやいや、神様なんだからそこは自信持つとけよーーー」

「確かに様付けはされるけど名字で呼ばれたのは久方ぶりだからね

「そりゃ。俺の事は好きに呼んでくれて構わない。で、文はどうに  
居るんだ？」

「文屋なり母屋に居るはずだけど…」

居なかつたような…

もう一度探してみるか。

俺はその場を後にし、再び雛と母屋へと来た。

「もうお世話なによりでしたけど……」

「諏訪子の話によると母屋に面するらしくんだ」

玄関には靴が無く、かわりに下駄が置いてあった。

イラストだと下駄だつたりするから合ってるのか?

「お邪魔しまーす」

俺と雛は靴を脱ぎ、廊下を進みつつ台所、居間の順に覗くと居間に文が居た。

「あれ？随分早いですね。あそこから少し距離があると思っていたのですが……」

「瞬間移動ってやつだ。ワープとも言ひ」

「へえ、ではでは早速インタビューさせていただきます」

そこからは文の質問タイムが始まった。

とは言つてもはたての質問に毛が生えた程度、大した事は聞かれなかつた。

はたてと同じく15分程度で質問は終了した。

「どうしてこの程度の質問なのか？つて顔ですね？」

くつ、確かにポーカーフェイスには自信が無いが露骨に顔の事言わ

れるとなんか妙に腹立たしいな。

「実は、既にあなたの情報は色々手に入れているんですよ」

「何故に?」

「壁に耳有り障子に目有り、ですよ。どこから情報と言ひつものが漏れるかなんて誰にも想像は付かないものです」

## 夏祭り開催のお知らせ

文の言つ事には一理ある。

俺の場合、幻想郷に来てから接触した人間なんて限られてるから大体検討はつくが……。

「何はともあれ情報提供感謝します。お礼にしては難ですが今日人里で夏祭りをやるそなんですよ。そこでこれを貴方にあげます」

文が差し出してきたのは2枚のチケットのような紙切れ。

内容はプリズムリバー三姉妹によるライブの最前列の席が記された入場チケットのようなものだった。

「いいのか？」

「どうせどうせ。ミスティアさんとでもテートがてら行つてきて下れー」

「なつーー..どうしてその事を！？」

「いやあ、しつかと聞きましたよ？いきなり出会い頭に『結婚してくれーー』ですからねえwww」

一番知られてはいけない奴に情報を握られたようだ。

もつと周囲に気を配るべきだったか……

「こ、このことは俺の沾券に関わる……出来れば穩便に事を運びたいわけだが……」

「へえ、そうなんですか。

鬼澤さんって子供好きのロリコンだったんですね」

と、そこで離がイタズラっぽく笑いながら茶化してきた。

「ぐつ！…俺はロリコンじゃない…！他の子供には興味すら湧かないからな…！」

これは実際ウソになる。

事実、俺は押しに弱い性格だと自負している。ゆえにフランスからのアプローチには紳士的な対応ができない。この場合のフランはさながら『ずっと欲しかった兄が出来た妹』としての甘え、だろうが。優柔不断とも言つのかも知れんが……

「TK、この事はできるだけ他言無用で頼む。  
俺はミスティアに嫌われたくない」

「まあ最初から記事にするつもりは有りませんでしたのでそこはご安心下さい。何せオフの時だったからカメラ持つてなかつたんですね」

「まあ安心して下さーよ。

色恋沙汰の記事は意外と人気が低いんです。そんな公開処刑のよつな真似はしませんよ」「

う～む、信じていいや～り…

「まあまあそういうもんになると助かる」

「それでは私は用事があるので失礼します」

文はそう言つて居間を出た。その後に少し話し声が聞こえ、諏訪子、神奈子、早苗が居間にやってきた。

「何のもてなしもなくて悪かったね。結界の張り直しをしていたんだよ」

「今お茶を煎りますね

神奈子と諏訪子は卓袱台を囲むようにして座り、俺と、さつきから何も話さない雛も腰を下ろした。

「はじめまして。私は八坂神奈子。一応神だ」

「射命丸から紹介が有つたかも知れないが、俺は鬼澤颯、外来人だ」

「うむ、よろしく」

「人里へ向かわなければ」

「ちょっと聞きたい事があるんだがいいかい？」

神奈子が俺に聞きたい事？

気になるな。

「内容にもよりけりだけど」

「いやなに、君が来る前の地球の状態を知りたいだけなんだけどね  
？何か変わった所は無かった？」

ふむ、変わった所と言えば温暖化程度だろうか。

「俺が知っているのは地球温暖化とオゾン層の破壊ぐらいスね」

「地球温暖化にオゾン層破壊か……？」

それを聞いて一休じつよつと黙つだるつか……？

「少し気になつていてね」

そこで早苗さんがお茶を煎れてくれたようだ。

「 いただきます」

俺はお茶を飲みつつ、神奈子と幻想郷についてどの程度知っているのか等をしばらく話し、俺と雛は守矢神社を後にした。

雛は用事を思い出したらしく、ふわふわと飛んでいった。

「セヒト、一通り用事も済んだしみすかーの家に行へか……」

幻想郷縁起はまあいつでも見れるし……

後でいいよな……

携帯にミスティアの家の前と入力し、転移した。

「…………籠守のようだな……」

何故判つたかつて？

屋台が無いからだよ。

祭があるから先に人里へ行つたのかも知れない。

ドラえもんの四次元ポケット（携帯内蔵）から籠手、眼鏡を取り出し、装着する。

次いで空く飛び立ち、千里眼で上空からミスティアを探すことになった。

「む？ あれは……」

眼下に広がるのは木々の生い茂る雑木林のよつな風景。

木々の開けた草原のど真ん中に高さがおよそ3メートルはあるつかと言づぐらいのバカでかい怪物がいた。

「な、なんじや あつや？」

見た目は人間の形をしてはいるものの、体色は黄土色、目はが一つ  
しかなく、右手には銃刀法違反？ナニソレオイシイノ？的な感覚で  
刃渡りが50センチをゆうに越す薙刀が握られていた。

せめてもの救いは獸の毛皮をベースに作られた服を着ていた所ぐら  
いか。

一応恥じらいがあるらしい。

幸いにもひづらは上空。

地上からは100メートルは離れている。

当然気づかれてはいない。

「どうすっかなあ……

明らか人里目指して歩いてるし……人を襲う確証は無いがあんな物騒  
な物持つてるし……」

とりあえず多少距離を取った位置に着地し、声を掛けてみた。

「あー、そこの道行く大きな方。そんな物騒な薙刀持つてどこに行くつもりなんですかね？」

戦闘力は800～1500ですか、基準がわからない。

巨人はゆっくり振り返り、雄叫びをあげながらドンドンドンと突進してきた。

「面倒だなあ」

目の前に、物理的な衝撃全てを弾く魔法陣を組む。

そこへ巨人はバカ正直にリンクのジャンプ斬りよろしく、力任せに魔法陣へ薙刀を振り下ろしてきた。

「ぐおおひー？」

が、薙刀が魔法陣に触れた瞬間、ビデオの逆再生のように巨人が後ろに吹き飛んだ。

「 WWW」

「グウ、オオオ」

さて、殺すのは忍びないのでと。

「クククッ。空間干渉魔法陣展開ーー！」

巨人の足元に半径1メートル程の魔法陣が展開され、その巨体を一瞬で跡形もなく消した。

「さあて、仕事サボつて寝てなきゃいいが……」

所変わつて紅魔館門前。

そこには門番の紅美鈴がウトウトしながら勤務していた。

「ううん……こんなにポカポカ陽気を当てるなんて……太陽は私に眠れと言っているのだろうか……」

と、そこへ今し方、颯と戦闘していた巨人が現れた。

「ぬおつ……なんか出てきたー…？」

その日門番は巨人（後で知ったが正式名称は一つ田馬らしげ）を倒し、珍しく門番の仕事をしたそつな。

## 集団催眠現象

巨人を紅魔館門前へと強制転移させた俺は一直線に人里へ向かった。

道中にミステイアの姿は無かつた。

「お？ もう祭つて雰囲気だな」

着地点は人里の3ヶ所あるうちの一つの出入口にある場所。

見える限りでは提灯が並び、道には所狭しと屋台が並んでいる。

「いたいた。みすちー発見」

千里眼に人数など無意味なようだ。

あつさりと屋台で鰻を焼くミステイアを見つけられた。

しかしかなりの行列が出来ていて忙しそうだ。

俺は大群衆の波を華麗に避け、ミスティアの屋台の裏に回った。

「ようミスティア。手伝うぜ」

「あつ！颶さん… 有り難いです」

流石に祭だけあってか尋常じやない人妖の数だ。

俺は会計 + 鰻の受け渡しを開始した。

鰻の量は次々に減り、20分程の激戦の末、見事に完売した。

「ふう。すげー人気だな」

「はは、ありがと」

まだ何人も並んでいたが完売の札を掲げると蜘蛛の子を散らしたように行列が消えた。

屋台の片付けを手伝い、ようやく全て片付いた。

「また手伝つてもらひちゃつて……」

「気にするな。さひと、業務話はここまでだ」

俺は文から貰つたチケット一枚ミステイアに差し出した。

「これは……プリズムリバー三姉妹のライブチケット?」

「どうだ?一緒に来てくれないか?」

「私なんかが一緒に行つて……いいの？」

「ああ。寧ろ一緒にしてくれの方が俺にとつては……」

ふと視界の端に見覚えのあるヤツが映つた。

あ、眼鏡そのままだつた……

「射命丸か」

「あやや、バレましたか」

路地からこいつらの様子をチラチラ伺っていた文が出てきた。

「俺が眼鏡を掛けている時は桟と同じ『千里先まで見通す程度の能力』を使える。以後、気を付けるんだな」

「ほう。これは良い」とを聞きました。私は用事を思い出したので「申し訳します」

「はなっから付いて来るつもりだつたのか…」

文は瞬時に上空へ舞い、その姿を消した。

「さてと、邪魔者は居なくなつたし一緒に来てくれるかい?」

「うん…」

何故いつもミステイアは暗い雰囲気を纏っているのだろうか…

もしや人間 자체がキライとかか?

兎にも角にも俺とミステイアはライブが行われるイベント会場的な

場所へ向かった。

会場入り口には3人の係員が居てチケットの整理をしている。俺とミスティアはチケットを係員に手渡してもらい、入場した。

会場に入ると何故か幽霊が沢山居た。と、言つよりは人魂と言つた方が適切かも知れんが……

「すごい人（魂）数だな」

「そうだね」

幸いにもライブはまだ始まっておらず、数分後開始されるようだ。

そして待つこと数分。

お馴染みのトリオが現れた。

ライブが始まると同時に会場は物凄い熱気に覆われた。

「なんか凄く懐かしい気分だ……」

「元の世界に帰りたい？」

「全然……と言つより向こうで一度、俺は死んでるだろ？から今更戻った所で知り合には1人も居ないだろ？」

親や友達は俺のために涙を流してくれたのだろうか……？

だとしたら「どうせ死んでるんだ」とピンパンしているのが物凄くいけないことをしているような気になってきた。

「「めん……」

「いや、気にすんな。俺は過ぎた事はどうでもいい主義だから」

しかし

音楽など聞いたのはとても昔のような気がして、少し懐かしかった。

そんな事を考へていると演奏が止まつた。

それも曲の途中で。

何事かと思い、プリズムリバー三姉妹を見ると後部の座席に視線を固定させているのがわかる。

すぐに後ろを向くが暗くてよくわからない。

「え？あれ？なんでこんな場所に死神が…」

千里眼を使用して見ると、何人かの死神が次々に人間、妖怪、幽霊を手にした鎌で『殺している』姿が目に映つた。

その中には画面越しで見たことのある赤髪でツインテールっぽい髪型で浴衣を改造した服を着ていた小野塚おのづか小町こまちの姿もあつた。

「な!? 何やつてんだよ! ?」

「つ！…ダメつ！！」

籠手を装備し、出入り口付近へ飛ぼうとするとい、ミステイアに引き留められた。

「離せへーーーHA NA SE ..... ジやなへーー 観殺スルシテ

「私が何とかする」

ミステイアの目が一瞬、妖しく光つた。

すると死神達の動きが急に鈍る。

「鳥目か！――ナイスだ！――暫くここで待つてくれ――！」

俺は今度こそ飛び、この会場に居る死神全員の足元に転移魔法陣を敷き、会場の外へ転移させ、同時に俺も転移した。

「さて、言い訳を聞こうか。死神諸君？」

「…………」

全員が無言。だが、視点がはっきりしていない。

もしや催眠術か何かに操られているだけなのだろうか？

「クヒヒヒ、随分生意気な人間が居たもんだ。たかが人間一人にや

られるとは死神の名折れ、恥曝し共が「

声の方を向くと…

「四季・映姫・ヤマザナドウ…」

「おやあ？何故宿主の事を知っている人間が居るのかなあ？確か巫女や魔女の情報しか入っていないが……」

そう言つて映姫は死神の一人を睨みつける。

「も、申し訳有りません」

「まあいい、こうして人里へ出向いたのもこいつた力ある人間を見つけ出し支配するためだからな。今回は特別に許してやる」

「ハツ、有り難きお言葉」

何かに……操られているのか？

宿主とか言つてるし。

映姫の目に映らぬようこつそりと眼鏡を取り出し、見てみると……戦闘力がバラつきこそあるが死神の平均値が40000、映姫に限っては999999とチート臭がブンブンする値だ。

「思念体の類か……」

「何？そこまで情報を持つていると云つことか……いやつ、イレギュラーなのではないか？」

「当たりか。その体を本人に帰す気、ない？」

「寝言は寝て言え。そう易々とこの逸材を手放すものか」

「じやあ消えろ」

一瞬で自分の足元に瞬間移動用の魔法陣を開け、映姫の背後へ転移し、頭を驚掴みにした。

「何つー?」

即座に『この体にある四季・映季・ヤマザナドウ以外の構成要素全て』を念頭に分解を発動させた。

すると映季は力なく倒れそうになり、俺はそれを支えた。

「さて、回りの死神さんに宿ってる方々も速やかに体を破棄して逃げないとこうなるから。10数える」

刹那、一斉に死神達は意識を失い、その場に倒れた。

「うはwww脅しておいて言うのもなんだがテラ弱虫www」

## 異世界からの来訪者

死神達は全員意識を失って、辺りに倒れている。

「で、なんでお前だけ立つてんの？」

「純粋に、あたいは乗っ取られていなかつた。それだけだよ」

乗っ取られていなかつた？

「じゃあ何で……ああ、山田さんには逆らえない立場だから否応無しに襲撃に荷担したのか。

「一応信じるよ。俺は鬼澤颯、外来人だ」

「あたいは小野塚小町、見てのとおり死神だ。  
今回は礼を言わせて欲しい」

「それは無用だな。俺は単純にミステイアを守りたかつただけだし」

「ミステイアを守る? もしかしてミステイアの彼氏か何か?」

「まだ彼氏じゃないな。

何でミステイア知ってるん?」

「たまに屋台へ飲みに行くからね」

「そりゃ、映季達を乗っ取つていた奴らって何がしたかったんだ?」

「映季様……いや、あの精神体達はこの幻想郷に居る『イレギュラーハウス』を探して乗っ取ろうとしていた……幻想郷の言葉で言つあなたみたいな外来人ね」

なんでもまたそんな事を……

「ちょうど一週間位前だったか、たまたまあたいは木陰でサボッ……休憩してた時に黒い霧が出てきてね。まるで生きてるかのよう

「蠢いて三途の川の匂ひ側に飛んでいたんだ

「黒い霧か……」

「それであたいたが映季様に報告しようとしたら取り付かれていたんだ。でもあれは靈体じゃなかつた、それだけは言える

ふむ……なんだろ、この異変フラグ。

回収しなきや駄目かなあ。

「俺の方でも探しを入れてみる。他に何か特徴はなかつたか？」

「他があ……なんか異界の扉がどうのいひ話してたけど何の事やう……」

異界の扉……もしや別の世界から来たとか？

奴らを逃がしたのはミスだつたか……

「あ、いたいた！君大丈夫？単身特攻してたけど……」

「ああ、事態は収束した。この死神達は得体の知れない何かに操られていた」

声を掛けってきたのはメルラン・プリズムリバー。

確かメルランの音を聴いてるとハイになるんだよな……

「操られていたつて……妖術の類かな？」

「いんや、精神体の類な」

そこヘルナサ、リリカ、ミスティアの3人が飛んできた。

「大丈夫！？」

「大丈夫だ、問題な」

「あの死神達は？」

いや、言わせろよ。

「精神体に操られていただけだった。今はもう大丈夫だと思つ

と、そこへさりに騒ぎを聞きつけてか2人の女性が飛んできた。

「これは一体何があつたんだ！？」

「死神達が精神体に操られていただけだ。今は意識がないようだが」

「ん？君は？」

「失礼、俺は鬼澤颯。初めまして」

「私はここ人里で教師兼自警団の統率をしている上白沢慧音だ。よろしく」

「とりあえずは問題解決したし、再発もしないだらうから祭り中止とかしないでもらえないかな。

何かあつたら可能な限り俺も手を貸すんで」

「根拠は？」

「俺が多数の精神体に逃げないと消すと言つて脅しを掛けた。んで一目散に逃げたから仮に復讐しに来ても俺しか狙わないだろ」

あいつらの目的は恐らくは外来人を乗っ取るか殺すか。

しかし明確に乗り移る手段が判つていないので唯一の心配だな。

黒い霧は危険っぽいが…

俺はその後、ミステイアと祭りを楽しみつつ問題を起こした妖怪の取締等を手伝つた。

～ Side change 八雲紫～

「おい！…話が違つじゃないかハ雲紫！…この幻想郷には精神体に対抗できる者はあんた以外に居ない筈じやなかつたのか！？」

「ええ。あなた達に対抗できる『者』は私以外存在しないわよ？」

「四季映姫を乗っ取つていた統領が外来人に消された。これをどう説明する…？」

「簡単よ、対抗できる』者』は居なくて『物』が存在した、只それだけの事よ」

「はあ？何を言つて」

「でもあなた達はもう用済み。消えて良いわ」

「貴様裏切つ」

私は喧しい精神体どもの境界を弄り、存在を消した。

なかなか面白いわ。

『鬼澤颯』君

暁く影（前書き）

テヌト期間が終わって漸く更新だけた……

PS3掛かつてたら誰だつて勉強するよね　orz

また亀更新ですが今後ともよろしくお願ひいたします m(—\_—)

m

— Side Change 鬼澤颯 —

結局あのあと精神体、黒い霧共々姿を現さず、無事に祭りは終了した。

それと意識が戻った死神に意識を手放す前の最後の記憶を聞いた所、やはり記憶が欠落していた。

ただ黒い霧によって記憶が途絶えたのは間違いないようだ。

「なんか……色々あつて遊んだ気になれないぜ……」

「そう? 私は楽しかつたけど……」

屋台を押しながらミステリアの家へ向かつ。

「ねえ

「ん？」

「その……明日って何か用事ある？」

「いや。特に無い」

「明日の昼に大ちゃん達と一緒に遊ぶ予定なんだけど……よかつたら  
来てくれない？」

「いいよ」

俺は口リコンでは無いが大妖精やチルノ達と遊ぶのも悪くない。  
俺は口リコンでは無いが！！

大事な事なので（『』）

ミステイアを家まで送り、俺は紅魔館に戻った。

「…………」

「…………。」

現在位置は紅魔館の門の前。

そこには立つたまま寝ている美鈴の姿とぞじゅうて悪戯してやうつか思案顔の俺の姿があった。

よし、くすぐり作戦でイコーか。

物音を立てずに美鈴の背後へ回り、首もとを軽く撫でた。

「ふみやあー?」

2、3秒やると猫ともつかない鳥を畠で兼鈴は田を見ました。

「な、何しゆるんですかー?」

「クックック WWW」

「デコポンもらいましたよ。」

それも氣を纏つたなかなかに痛い奴。

「こつてえな……せつかく咲夜さんに黙つていってあげようかと思つたのにどうしようかなあ……」

「す、すみませんでしたっ！！

でも寝ている女性の首筋を撫でるなんて、デリカシーが足りませんよ？」

「いやあ、すまんすまん。ま、起こしてあげたんだからいいだろ？」

大声出して咲夜さんに気付かれるよりは、

「むう、今度は許しませんからね？」

「いやもつ寝るなよ……」

美鈴に軽く会釈し、俺が館内に入ると妖精メイドの一人が寄ってきた。

「おせ……お嬢様がお待ちです、ホールへお連れ下さい」

「ぶふうー、今おせつけて言ひ掛けたよねー？」

「うー、冗談を。アハハハ」

聞かなかつた事にしょひ、そうしょひ。

俺はいい加減覚えた道のりでホールへと向かつた。

「遅いっ！！」

「いやあ、サ セン」

ホールへ入るなり第一声がそれ。俺が応答した直後に走る腹部への衝撃は最早テンプレ。

「ねえ様の言ひとおり遅いよー？」

「わ、わかったからどうしてくれ……苦しい」

失念していた……完全な不意打ちだ……口に胃液が昇つて来やが  
つた……

「一つ聞きたいんだけどいいかしら？」

「なんだ？」

「咲夜、カゴを持ってきなさい」

「畏まりました」

一瞬咲夜が消え、再び現れたと同時に高さ2メートル、縦横幅が1.5メートル程度の箱状の鉄格子に囲まれた見覚えのある少女が出現した。

「姫海棠！？なんでオリなんかにー！？」

その少女は姫海棠はたてだつた。

しかも何故か猿轡に両手拘束に田隠しが施されており、パツと見た感じ誘拐にしか見えない。

「じつはせひいたよつね。で、じつせつたら連絡が取れるの？」

「と、とりあえず誘拐は良くないから解放してあげてくれ……話はそれからだ……」

「仕方ないわね、咲夜

「わかりました」

一瞬ではたてを囲んでいた檻、拘束していた縄、猿轡、田を隠していた布が消える。

「ガクブルガクブル」）

いやまあトライマッてるであらう予想はしていたがなにされたんだ  
……？

気になるようにならないような……

「気になります？」

「読心術！？ どんだけ万能なんだよ咲夜さん……」

「（君）は誰？ 私はどう？」

「ちよ……マジで大丈夫か姫海棠」

「あ、鬼澤さん……」

ようやく周りの事が頭に入ってきたのか、はたては辺りを見回してからブツブツと呟きだした。

「確かに妖怪の山に帰る途中に後ろからいきなり薬嗅がされて……気が付いたら目が見えなくて動けなくて……」「解放したわよ、早く連絡手段を教えなさい」

「ああ、姫海棠、携帯を貸してもらえないか?」

俺は姫海棠から携帯を受け取った。

「そうだな、定期連絡でも入れるか。こうじよつ、二日ご一回、この携帯に連絡を入れる。電話つて言つて遠く離れている相手と会話をするための機能なんだ」「

「成る程、要はその携帯をソイツから奪つて持つておけば良いのね？」

「最後まで聞け。俺は敢えて携帯の操作方法は教えない」

「何故？」

「それをしたら姫海棠を介した意味が無くなるだろ？それに携帯はかなり重要な役割を果たす時がある」

「あくまでその天狗を介して連絡を取りたいと？」

「どこのつまりそういう事だな」

流石に他人の所有物を奪つてまで連絡を取りたいとは思わない。

いくら約束と言えど姫海棠にとつてかなり酷だりつ。

念写も出来ないだろ？

「残された時間は少ない。

一応他の手段も模索するが今回はそれで勘弁してくれ

「まああんたがそう言つなら仕方ないわね」

「//コアはやれやれと言つた様子で肩を竦めた。

その後姫海棠は解放され、俺は夕食を頂き、なんのイベントも無く風呂に入り、そして浴室（仮）へ戻つた訳だが……

「まあ予想の範囲内だからそこまで驚かないけど……」

明らかに部屋の中に誰か居る気配がある。

「また部屋に入ったのかフラン、遊ぶなり明日二

」

「「」わざんよひ、鬼澤君」

しかし部屋の中に居たのは俺の予想に反し、八雲紫だった

## 八雲紫の思惑

。

「なるほど、大方話は理解したがわざわざあわてまわす必要はあったのか？」

紫の見込み違いだったら俺間違いなく死んでたよね？」

部屋に入ると紫に話があると言われ、聞くと先の一件の精神体どもを別の世界線からひっぱってきたのは他でもなく紫らしい。

どうやらワザと俺を襲うように仕向けていたらしい。

「私が気になつたのは貴方の能力よ。3つも持つてるし」

「俺の能力？」

「そう。貴方は気付いてないかもしないけど『正と負を操る程度の能力』、『ありとあらゆる事象を吸収できる程度の能力』、そして三つ目が

「

『世界に愛される程度の能力』

「は？ 前者の2つはいいとして最後の何？」

世界から愛されるってなんだ？  
擬人化でもしてくれるん？

「最初私もそう思ってね。興味本位でその能力の性質を知りたいと思つたのよ」

「てか俺のデフォスペックに3つも能力があつたんだ……」

「結論だけ言つわ。おそらくその能力は貴方の望まない事が起らなくなるような能力だと推測したわ」

「それってある種レミリアと同じ能力じゃん」

「まあ確かに運命を規定できる点はそうかもしないけど残念ながらそういうものいかなーと思つわ」

「なんでだ？」

「世界は貴方の望まない形で貴方の望みを叶える可能性があるといつよ」

「望まない事を起こさないのに望まない形で叶える？」

意味が分からん……

「例えばそうね、貴方が誰かに殺されそうなとき貴方が生きたいと望むとする。

すると世界は殺人者を止めるのではなく殺人者を殺す事でその望み

を叶えるかも知れない」

「つまりその状況下で俺が生きたいと望むと俺のせいでの誰かが死ぬ  
と?」

「あくまで物の例え、だけどね。可能性は〇〇じゃない」

「これは……神の魔改造デバイス要らなかつたんじやないか?」

しかし言わないと気付けない能力だな……

「まあ気を付けなさい。

余計な望みを強く願わない事ね。  
でないと周りに迷惑が掛かりそつだし」

「みたいだな」

しかし実感が湧かない……

てか正と負を操る程度の能力って何だよ……

「その能力の検証は貴方自身がやらないといけないわね。私には判  
らないし」

正と負か  
……

+と - であつてんのかなあ…… 数学なんて興味無いのに……

(悪いけどまだまだ貴方には動いてもらつわよ。  
その能力、存分に發揮しなさい)

その後紫はすぐに家へ帰つた。  
なんつーか自由な奴だ。

「ああてと、眠くないなど寝るか」

結局能力は判らず、他にせることも無む事こので寝る俺だつた。

弾幕鬼」ひこ 前編

翌日の約12時頃、俺はレミコアに許可を得、ミスティアの家へと向かった。

「ミスティア～？居るか～？」

返事が無い、ただの（　）

ふむ、もう湖畔に行つたのかな？

湖畔までそれほど距離が無かつたので俺は歩いて湖畔まで向かった。

「お～大方揃つてゐな

湖畔付近の雑木林からミステイア、大妖精、チルノ、ルーミア、リグルの姿が確認できた。

「おお～い

「ムツ！？アイツは……」

「おはよ～なのだ～」

「いやいや、もう『』なんにせば『』だろ時間的に」

「モーなのかー？ならこんにちワソンなのだ～」

「（）ふつ わわわルーミア、もつ挨拶ネタは古じからーー。」

「モーなのかー」

「かど」で覚えたんだよー？

なんなの？

TV持つてんの！？

「そういやリグルとは初対面だったな、俺は鬼澤颯、ただの外来口

「

「氣を付けて……」つい、ただの『れいふま』だから

レイプ魔！？

何故そうなった！？

「ちよ、チルノ何言ひてやがる、俺はそんなヤシジヤあ断じてねえ  
「嘘だつ……」の間あたいの」とおかそつとしたもん……！」

「アホか……お前が蛙を氷付けにしてたから羽交い締めにして止め

たんだらうが……」

「よ、よろしく鬼澤さん……」

「誤解だ……だからそんな汚物を見るような視線を向けるなリグル！……」

「なんで名前知ってるの？」

「グッ……痛いとこり突きやがって……」

「原作知識です（笑）」

「原作知識？」

「あ～、幻想郷縁起で知ったって言えば解るか？」

「ああ、成る程ね」

「で、今日は何をするんだ？」

「よくぞ聞いてくれた…！」

今日は『弾幕鬼』って『』をやるのよ…。」

無い胸を逸らしてチルノが威張る。

「何だ弾幕鬼』って？ 弾幕』こなら判るが……」

「んつふつふ~、簡単に言えば

「

ルールはこうだ。

鬼となつた者が逃げ回る者に弾幕を張り、弾に命中した者が鬼となる。

但し鬼になれるのは3度まで。

4回目の鬼となつた者が敗北となり、罰ゲームを受けるそつだ。

そして鬼以外の者同士で弾幕をぶつけ合つて被弾した場合、鬼になれる回数が減少し、0になつた場合も敗北となる。

要は全員が敵だが協力して鬼を潰すことも出来るわけだ。

「それじゃ一弾幕鬼！」と開始するわーー！

「鬼は？」

「あんたがやりなさい、鬼澤颯！…せめてものハンデよ

「何故にハンデ？」

「最初の鬼は回数にカウントされないんですよ」

成る程な。

駄菓子菓子、それはそれで協力出来ない気が……

「んじゃ鬼は100数えてから動いてね…………始めっーー！」

刹那、突風が俺の周囲を突き抜けた。

訂正、チルノ達が一斉に散つた風だつた

「98…99…100!! 数え終わつたのは良いんだが、これじゃあかくれんぼだよな……」

辺りの木陰には人の気配すらない。

「さてはてどこに隠れたんだ?…………っ!-?」

辺りをキョロキョロしていると、どこからか音もなく弾幕が迫つてきていた。

距離は50m程度で速度は人が歩く速度と大差無い。だが

「あいや完全にホーミング弾だな、逐一向を補正してやがる」

飛んできている弾幕はカクカクと揺れながら俺曰掛けてしまふと進んでいく。

弾幕の見た目からしてミスティアやチルノの弾じゃない。とすると大妖精カリグルが撃つできている。

回避できないとわかつたらやる」とまゝ一つ、投げるか撃墜するかだ。

俺は籠手、眼鏡、ネックレスを装着し弾幕で正確にホーミング弾を撃ち、相殺した。

「う～む、弾幕の出元がわかればなあ……」

とつあえず千里眼で辺りを見回す。

「ほっ、」の弾幕はルーミアだったか。なら攻守交代だ

一直線にルーミアが居る木陰との距離を詰める。が

「あぶねつー！」

横から大量の氷塊が飛んできた。

慌てて高度上昇し、回避する。

「ちつ ハズしたか…ルーミア…逃げるよー…！」

「そーなのかー」

チルノとルーニアは協調してゐるのか……面倒な……

その場からふわふわと浮かびながら離れるルーニアとチルノ。

「やられっぱなしは御免だぜ！――」

すかさず一人の背中に向けて5段階角度調整ができる擬似的なホーミング弾を放つ。

「あいたつ――！」

「よつしゃああ――！」

逃げるチルノの背中に擬似ホーミング弾が命中したのを確認し、俺は一田散に逃げた。

「ちつ、待ちやがれーーー！」

すかさず踵を返し、追いつくるチルノ。

だが

「『』みんなのだ~」

「ルーミアー？」

ルーミアがチルノ目掛けて弾を打ち始めた。

鬼を狙つようにプログラミングでもされていたのだろうか……

そしてここに来て漸く『意思の疎通』が役に立つた。

『人間から見て5時の方向から虫が狙っているぞ』

木々がそう教えてくれた。

言われた通り5時の方向を千里眼で見透かす。

(え! ? 見つかった! ?)

一発しか放てない上に溜時間の長い弾だが、初速、弾速に特化し、  
角度補正も少し出来る弾を溜めている真っ最中に見付かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2566v/>

---

†正義の崩壊者†

2011年12月1日12時48分発行